

厚生労働科学研究費補助金
障害者対策総合研究事業
(身体・知的等障害分野)

知的障害者の地域生活移行に関する
支援についての研究

平成22～24年度 総合研究報告書

研究代表者 深津 玲子

平成25(2013)年 3月

目 次

I. 総合研究報告

| | |
|---------------------------|---|
| 知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究 | 1 |
|---------------------------|---|

深津 玲子

II. 研究成果の刊行に関する一覧表

III. 研究成果の刊行物

| | |
|----------------------------------|----|
| 医療・福祉連携による、発達障害成人に対する福祉サービス提供の試み | 17 |
|----------------------------------|----|

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業I

| | |
|---------|----|
| 支援の実施状況 | 19 |
|---------|----|

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業II

| | |
|---------------|----|
| 小グループによる支援の試み | 21 |
|---------------|----|

| | |
|---------------------|----|
| 青年・成人期にある発達障害者の運動能力 | 23 |
|---------------------|----|

| | |
|--------------------------------------|----|
| 発達障害者を対象とした小グループでの就労支援に向けた支援プログラムの試み | 25 |
|--------------------------------------|----|

| | |
|---------------------------|----|
| 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（I） | 28 |
|---------------------------|----|

| | |
|----------------------------|----|
| 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（II） | 29 |
|----------------------------|----|

| | |
|--------------------------|----|
| 就労支援を要する青年期発達障害者の上肢機能の調査 | 30 |
|--------------------------|----|

| | |
|--------------------------------|----|
| 発達障害者の就労支援モデルの検証の試み Aさんの事例を通して | 31 |
|--------------------------------|----|

Develop the ICF-Based Assessment to Describe Conditions of Adults with Autism Spectrum Disorders:

| | |
|---|----|
| Identification of the Relevant Categories | 33 |
|---|----|

| | |
|---------------------------|----|
| 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査 | 34 |
|---------------------------|----|

| | |
|--------------------------------|----|
| ICF（国際生活機能分類）をもとにした活動・参加に関する調査 | 35 |
|--------------------------------|----|

| | |
|-------------|----|
| ICF支援ツール一覧A | 44 |
|-------------|----|

| | |
|-------------|----|
| ICF支援ツール一覧B | 47 |
|-------------|----|

| | |
|-----------------|----|
| ICFに基づく支援ツールマップ | 49 |
|-----------------|----|

| | |
|-----------|----|
| 障害のある人の将来 | 55 |
|-----------|----|

| | |
|----------------------|----|
| 入所知的障害者のきょうだいの課題と対処法 | 57 |
|----------------------|----|

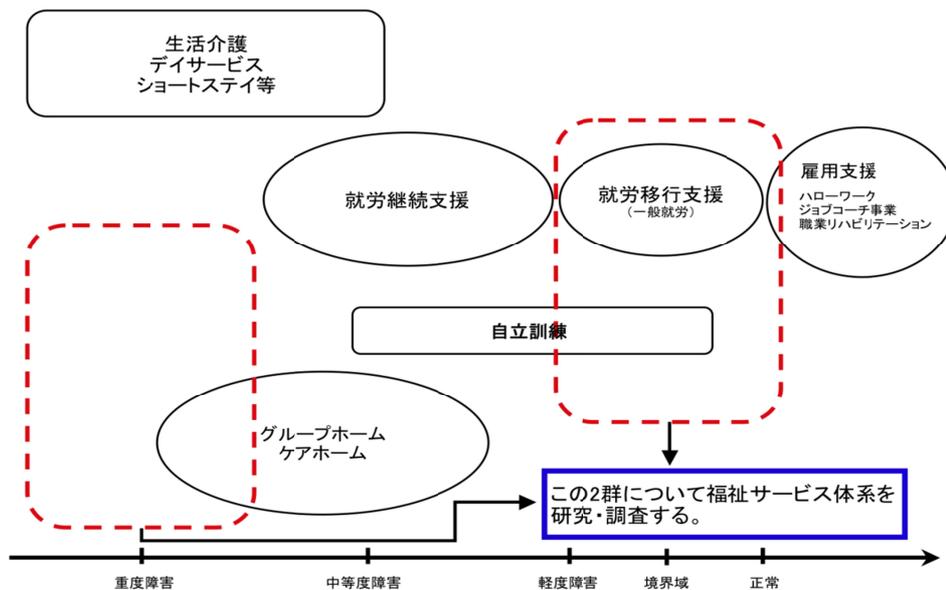
知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究

研究代表者 深津 玲子 国立障害者リハビリテーションセンター

研究要旨

現在福祉サービス体系が十分には整備されていないと考えられる2つの群である、重度知的障害者群（重度群）と軽度～境界域知的障害者群（軽度群）の地域生活移行に関する支援手法の開発及び体系を提言するため、1．重度知的障害者入所施設における地域移行支援の実施と困難要因の分析、2．発達障害を伴う軽度群に対する福祉サービスとしての就労移行支援のプログラムの開発、3．その一環として、就労を目指す発達障害者の支援ニーズを明らかにするアセスメントツールの開発、4．発達障害を伴う軽度群の生活補完及び就労支援に役立つ支援機器に関する調査、5．施設入所中の重度群および自宅で同居する軽度群のきょうだいの課題の抽出と対応方法に関する調査を行った。

重度知的障害者入所施設における地域移行については、今回の検討の範囲では、個人の身体・知的重症度および異常行動といった心身機能は移行を困難にする因子とはなりにくく、家族の理解や地域の支援体制といった環境因子が大きく関与する可能性が示唆された。発達障害を伴う軽度群に対する就労移行支援では、一定の手続きを経て、就労移行支援モデルの開発を行った。開発した就労移行支援モデルにもとづいて支援を行った対象者の就労移行支援利用期間は、開発前に支援を行った対象者と比較して3.5月短くなり、15ヶ月であった。また、地域の障害者就業・生活支援センターとの連携による職場定着支援を行い、離職者は出ていなかった。就労を目指す発達障害者のアセスメントツール作成については、国際生活機能分類（以下ICFと記す）に基づきアセスメントシートを作成、検定の結果、発達障害者と統制群とでICF総得点に有意差がみられた（ $p < 0.01$ ）。また、発達障害当事者と支援者では、支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっているか、ニーズを拾いきれていないことが示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害者の就労に役立つ支援機器に関する研究では、68の個別支援ツールを抽出し、縦軸をICFの心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。きょうだい調査については、入所中の利用者と母親の自己概念の変化は認められたが、父親ときょうだいには変化は認められなかった。きょうだいの課題は、「（入所前および帰省時における）入所者の家庭での行動」「親亡き後の後見」について多くあげられたが、家族支援のニーズが指摘された項目は、きょうだいから母親からよりも有意に少なかった。また、対照群に比べて入所者の母親の自己概念は有意に低かったが、きょうだいと父親の自己概念には有意差はなかった。「障害者の将来の生活」が青年期および成人期のきょうだいの最も大きな課題であると示唆された調査結果をもとに、パンフレットを作成した。



A. 研究目的

現在福祉サービス体系が十分には整備されていない重度知的障害者群（重度群）と軽度～境界域知的障害者群（軽度群）について、地域生活移行のための福祉サービスを用いた支援手法について調査研究を行い、地域生活の実現に必要な支援手法と体系を提言する。具体的には、以下の5点を明らかにする。

1. 重度群の地域生活支援体系を、入所施設における地域生活移行を通して検討し、地域生活移行を困難にする因子を分析する。
2. 発達障害を伴う軽度群に対する福祉サービスとしての就労移行支援のプログラムを開発する。
3. その一環として、就労を目指す発達障

害者の活動と参加を国際生活機能分類（以下 ICF と記す）に基づき評価し、支援ニーズを明らかにするアセスメントシートを開発する。

4. 発達障害を伴う軽度群の就労支援に役立つ支援ツールを明らかにし、ICF に基づいて分類したマップを開発する。
5. 施設入所中の重度群および自宅で同居する軽度群のきょうだいを対象に、アンケート調査を行い、知的障害者両群の同胞が抱える課題を明らかにし、対処方法を検討する。

B. 研究方法

1. 重度知的障害者の地域生活移行に関する研究（高木晶子）

重度群については、障害児施設である国立障害者リハビリテーションセンター 自

立支援局秩父学園(以下、秩父学園と記す)において、入所者 62 名中年齢超過者(18 歳以上)54 名を対象に、1-1)1 年目には「地域生活移行に対する家族の理解」に関するアンケートを全家族に対して行い、1-2)2 年目には 54 例全例に、大島分類改訂版を用いて身体・知的重症度を、異常行動チェックリスト日本版を用いて行動障害の程度を評価し、1-3)22~24 年度前半に地域生活移行した 15 名(移行群)と非移行群 39 名について移行を困難にする個人因子および環境因子の分析を行った。

2. 軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究(四ノ宮美恵子)

発達障害を伴う軽度群に対する就労移行支援の手法を検討するにあたっては、22~24 年度前半に、国立障害者リハビリテーションセンター自立支援局において支援を行った発達障害者で、かつ WAIS-R または WAIS-III の PIQ において 55 以上 85 未満(100 - 3SD ~ - 1SD) の者 6 名を対象とした。これらの対象に 支援課題の抽出、ICF の「活動と参加」および「環境因子」にもとづいた支援ニーズの抽出、「働く」という目標の下、その達成に必要と考えられる下位目標の設定、下位目標と支援ニーズに則した支援プログラムの整備、プログラム実施上の課題整理の手続きを経て、就労移行支援モデルの開発を行った。

3. 発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み(鈴木さとみ)

就労を目指す発達障害者の ICF に基づく活動と参加に関する評価アセスメント開発

にあたっては、3-1)初年度に、ICF コアセット開発の手続きに準拠し、過去 5 年間の学術論文について PubMed および Cochrane Library を用いて Autism、Autistic spectrum disorder、Pervasive developmental disability それぞれについてキーワード検索(needs, assessment, activity, participation, environment, services, social support, vocational rehabilitation, support for work, habilitation, social skills, community services, collaboration, inclusion, integration)を行い、ヒットした文献 927 件をレビューし、18 歳以下を対象とするもの、薬物療法、脳画像、遺伝子研究、発達障害以外の精神疾患を対象とするものを除外し、3-2)2 年目に初年度の文献検討で該当した論文 32 編から ICF の活動と参加および環境因子項目の抽出を行い、試行版アセスメントシートを作成し、発達障害者 3 名および統制群 15 名を対象に予備調査を実施し、3-3)最終年度は前年度の予備調査結果を踏まえ、改訂版アセスメントシートを作成し、これを用いて就労支援サービスを受給する発達障害者 21 名とその支援者及び統制群 21 名を対象に調査を実施した。

4. 知的障害者の生活の補完的手段の研究(石渡利奈)

発達障害者の就労支援に役立つ支援ツール調査に関しては、4-1)初年度就労に向け必要な職業生活および家庭生活における支援ニーズの調査を 発達障害のある中高生の親 7 名を対象に「就労時の職業生活、日常生活で特に困難を抱えるであろう内容」と、「支援ツールの活用が有効であると考えられる領域」を探る聞き取りを行い、 発

達障害のある中高生の親 17 名および就労経験のある発達障害成人の親 2 名を対象に、「ターゲットとする困難の解決に向け構想した支援ツール案を提示し、その利用ニーズ」と、「そのような支援ツールを開発する際の留意点」を把握する聞き取りを行った。4-2) 2 年目に就労に向け役立つ支援ツールの調査として、検索キーワードを用い、インターネット上の検索エンジン (Google)、先行研究の報告書などにより、就労に役立つことが期待される個別支援ツールの抽出を行った。4-3) 最終年度は前年度作成したリストを基に ICF に基づく支援ツールマップの開発を行った。具体的には、個別の機器について、機器が必要となる背景にある心身機能のコード、機器が支援する活動参加のコードを複数該当可としてリストに記載した。分析は、軽度～境界域知的障害を有する発達障害者の親、リハエンジニア、作業療法士の協議により行った。これらの結果を基に、縦軸を心身機能、横軸を活動参加とする表を作成して、機器のマッピングを行った。

5. 入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念 (北村弥生)

きょうだい調査については、18 歳以上の発達障害を伴う軽度群 12 名のきょうだいを対象とした調査 1、重度知的障害者施設入所者 50 名のきょうだいを対象とした調査 2、を実施し、調査 2 の結果提示された課題である「障害者の将来」に関する情報パンフレットを作成し、重度群きょうだいに送付し、課題が解決されたか否かの調査 3 を行った。

(倫理面への配慮)

本研究は、国立障害者リハビリテーションセンターにおける倫理審査委員会の承認を受けて実施された。また、参加にあたっては、研究への協力について口頭ならびに文書で説明し、同意書により同意を得た。

C. 研究結果

1. 重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

入所中の重度群に関する検討では、1-1) 家族アンケートでは「地域生活移行に関する考え」に対して、38%が肯定的、27%が否定的、よくわからないが 33%であった。また「地域生活移行にかかわる動向」については「知っている」23%、「知らない」77%であり、「情報提供の機会に参加を希望する」は 28%、「希望しない」24%、「わからない」48%であった。1-2,3) 18 歳以上の入所者のうち研究期間中の地域移行者数は 17 名である。移行者の年齢は 19 歳から 52 歳、在籍年数は 3 年から 40 年、性別は女性 5 名、男性 12 名である。移行先は埼玉県 11 名、東京都 2 名、栃木、群馬県、千葉県が夫々 1 名である。入所施設 14 名、重心施設 2 名、家庭 1 名である。(表 1)

障害程度区分認定取得に関して障害程度区分認定終了者 34 名中、「区分 4」が 3 名 (9%)、「5」が 5 名 (15%)、「6」が 26 名 (76%) である。移行群、非移行群で異常行動チェックリスト日本版および大島分類改訂版のスコアに有意な差はなかった。

2. 軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

発達障害を伴う軽度知的障害者に対する

就労移行支援モデルの開発にあたっては、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」の3つの場面を支援フィールドとして位置づけ、「働く」ためにという統一した支援の文脈設定、体験学習と体験の振り返りによる意味づけの支援を軸に、「自己理解」、「他者理解」、「社会的規範の理解」を下位目標とした支援プログラムの整備、就労支援と社会生活力を高める支援の並行した、かつ螺旋的な支援プログラムの整備、定型発達の段階に則した支援プログラムの整備、に留意した。考案した就労移行支援モデルは図1、ならびに実際の支援項目例は、表2のとおりである。

今回の対象者6名中、支援継続中の1名を除いた5名については、全員が就職という支援目標を達成したが、開発した就労移行支援モデルにもとづいて支援を行った3名の就労移行支援利用期間は、開発前に支援を行った2名と比較すると3.5月短くなり、15ヶ月であった。5名の就職先における業務としては、事務補助の1名を除いては、梱包や清掃、商品の品出しなどのバックヤード業務や工場のライン作業であった。いずれも、地域の障害者就業・生活支援センターとの連携による職場定着支援を行い、離職者は出ていなかった。

3. 発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

就労を目指す発達障害者のアセスメントツール作成については、3-1)文献検索の結果、PubMed 203件、Cochrane724件がヒットし、文献レビューにより今回の研究対象論文は32件であった。これらの論文から抽出した ICF の活動と参加、環境の各項目

に該当する記述は、第2分類の活動と参加において59/118項目、環境で37/74項目、詳細分類の活動と参加において36/220項目であった。3-2) 試行版アセスメントシートは73、平均所要時間は発達障害者で45分、統制群は20分であった。独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定の結果、発達障害者と統制群とで ICF 総得点に有意差がみられた ($p < 0.01$)。発達障害者と支援者での自己評価と他者評価の違いについては、ICF 得点上で差が出たが、統計上の有意差はなかった。3-3) 改訂版アセスメントは質問項目数73、平均所要時間は発達障害者で30分、統制群は15分であった。これを用いた調査で、独立サンプルによる Mann-Whitney の U の検定の結果、発達障害者と統制群とで ICF 総得点に有意差がみられた ($p < 0.01$) (図2)。

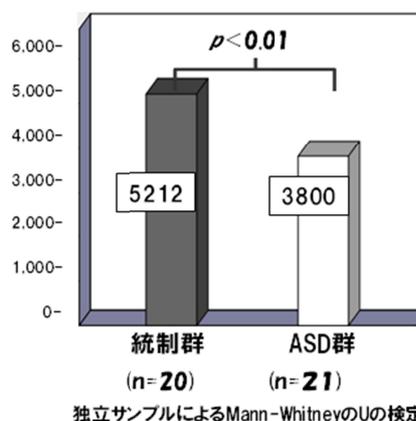


図2 改訂版アセスメントによる発達障害者 (ASD) 群と統制群の ICF スコア

下位項目の第一分類の活動と参加では、「学習と知識の応用」($p < 0.01$)、「一般的な課題と要求」($p < 0.01$)、「コミュニケーション」($p < 0.01$)、「運動・移動」($p < 0.05$)、「家庭生活」($p < 0.01$)、「対人関係」($p < 0.01$)、「主要な生活領域」($p < 0.01$)、環境

因子では「支援と関係」($p < 0.05$)、「サービス、制度、政策」($p < 0.01$)について有意差がみられた。発達障害者本人による自己評価および支援者による他者評価の比較では、「話し言葉の理解」、「非言語的メッセージの理解」、「書き言葉によるメッセージの理解」、「非言語的メッセージの表出」、「会話の持続」、「多人数での会話」といった「コミュニケーション」領域と「複雑な対人関係」において自己評価は他者評価よりも有意に低かった。これは支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっていることを示す。

4．知的障害者の生活の補完的手段の研究

就労に役立つことが期待される個別支援ツールとして、68の個別ツールが抽出された。ツールの形態の内訳は、ハードウェア50、ソフトウェア18であり、今後の見通しとして、携帯端末用のソフトウェアの発展が期待された。機能としては、活動と参加の8項目(1．学習と知識の応用、2．一般的な課題と要求、3．コミュニケーション、4．運動・移動、5．セルフケア、6．家庭生活、8．主要な生活領域、9．コミュニティライフ・社会生活・市民生活)心身機能の2項目(1．精神機能、2．感覚機能と痛み、3．音声と発話の機能)に関わるツールがあることが把握された。この分析結果を基に、縦軸をICFの心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。

5．入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

きょうだい調査については、「調査1」で

は、訓練利用者と母親の自己概念の変化は認められたが、父親ときょうだいには変化は認められず、訓練終了後にきょうだいの心配がもっとも高かった項目は「利用者の将来(結婚、住居、仕事)」であった。「調査2」では、きょうだいの課題は、「(入所前および帰省時における)入所者の家庭での行動」「親亡き後の後見」について多くあげられたが、家族支援のニーズが指摘された項目は、きょうだいからが母親からよりも有意に少なかった。また、対照群に比べて入所者の母親の自己概念は有意に低かったが、きょうだいと父親の自己概念には有意差はなかった。「調査3」では、青年期および成人期のきょうだいの最も大きな課題であると考えられた「障害者の将来の生活」に関する情報提供(パンフレット)への評価は高かった。

D．考察

1．重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

入所者の地域生活移行について今回の検討の範囲では、個人の身体・知的重症度および異常行動といった心身機能は移行を困難にする因子とはなりにくく、家族の理解といった環境因子が大きく関与する可能性が示唆される。

2．軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

障害福祉サービスにおける就労支援モデルを開発することで、支援目標とその下位目標が明確になり、下位目標に則した支援プログラムを整備することが可能となった。これらにより、支援者側の支援の文脈が統

一され、対象者全員が就職という帰結に至ったほか、支援期間の短縮が図られたものと考えられた。

3. 発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

発達障害者は自己を客観的に評価することの困難さが示されているが、今回開発したアセスメントシートを用いた調査の結果、発達障害者群の自己評価の結果は統制群と比較して有意に低く、活動および参加に関する支援ニーズを把握するのに適していると考えられた。これまで自閉症の中核症状とそれらに関連して起こる対人面での課題については研究が進んでいるが、発達障害者は家庭生活やコミュニティライフ、社会生活、市民生活など様々な生活場面で困難状況を呈しているものの、そうした日常生活機能に関する系統的な調査研究はほとんどなく、今後さらに検討が必要な分野と考える。

4. 知的障害者の生活の補完的手段の研究

発達障害者の就労に役立つ支援ツール調査では、就労時の困難さの解決に向け開発が求められるツールは、職場生活を営む上での土台となる、「自身の言動を自己管理し、日々のスケジュールの遂行する」能力領域に焦点を当てる必要があると考察された。また、支援ツールを開発する際は、「ツールの大きさ」「ツールのデザイン」「ツールの使用の容易性」「ツールのカスタマイズ機能」「ツールの音声でのメモ機能、音声ナビゲート機能」「ツールでの1日の生活の時間割立て機能」「ツールの学習機能」「ツールの

ゲーム機能・トークンエコノミー機能」などに留意することが有効と考えられた。

本研究で開発したマップにより、「補いたい心身機能」や「支援したい活動」に関係するツールを支援者が見つけ、支援に役立てられることが期待される。

5. 入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

「調査1」では、利用者と母親では訓練後には訓練前に比べて自己概念が上昇したのに対し、父親の自己概念は変化しなかった。訓練前には、対照群に比べて母親ときょうだいの自己概念は有意に高く、利用者と父親は差がなかった。これらの結果は、家族構成員により自己概念に対する障害の影響は異なり、訓練前においても、訓練中においても、異なる支援方法が必要であることを示唆する。

また、きょうだいが「利用者の将来」を心配していたことが明らかになり、訓練終了後にも、利用者のみならず家族も視野に入れた支援が必要と考えられた。

「調査2」の回収率は3割程度であり入所者の家族の状況を代表するとは言い難いが、回答者については、予測した「入所者ときょうだいの関係が希薄であること」「親亡き後の関係が薄いこと」は否定された。しかし、未成年のきょうだいも保護者から「後見人」と考えられており、きょうだい自身からも「親亡き後の心配」「障害についての情報不足」が回答されたことは、入所者の将来を見据えた情報提供を、未成年のきょうだいにも行う必要があることを示唆する。

また、以下の3点が示唆された。

1)「親子の会話がオープンである」と回答したきょうだいが多かったにもかかわらず、障害に関する説明については親子の回答はほとんど一致せず、親からの期待を、きょうだいは実質以上に感じる傾向があった。したがって、特に、入所者の将来について親子で話しをする機会を作り、親子で共に将来計画を立てることが有効と考えられる。

2) 未成年のきょうだいは入所者の将来の見通しや社会資源に関する情報提供に乏しかったが、きょうだい会のような機会への参加希望者は少なかったことから、パンフレットなどの準備及び保護者に伝達方法を教示することが有効であると考えられる。ただし、経験したことがないために要望をしない可能性もあるため、きょうだいに対する直接的な支援及び家族に対する支援を試行し、必要性和有効性を確認する価値はあると考えられる。

3) 母親の自己概念のうち、特に、「入所者との関係」と「援助」領域の得点が低かったことは、母親は、入所した子どもに対する役割が、子どもが成人しても確立しにくく、支援が必要であると考えられる。

先行研究では「きょうだい関係がよい場合に質問紙法による調査では、回答率が高いこと」が指摘されているため、回答を得られなかった家族については、別の支援方法を検討する必要もあると考えられる。

「調査 3」では、回答者のすべてが入所者の将来への不安を自由回答欄に記述し、ほとんどがきょうだいへの負担を記述した。パンフレットは課題の所在を整理し対処方法の方向性を示すように設計したが、不安を解消することはできなかつたと考えられる。また、親ときょうだいの話し合いや、

きょうだい同士のグループワークに発展することも、直接にはなかつた。したがって、課題を整理した後の対処の支援方法を検討することは今後の課題である。

E. 結論

1. 重度知的障害者の地域生活移行に関する研究

障害児入所施設(秩父学園)において、18歳以上の年齢超過者54名を対象とし、研究期間内の地域生活移行群(15名)と非移行群(39名)を対象に、環境因子として「地域生活移行に対する家族の理解」に関するアンケートを用いて調査し、個人因子として心身機能を大島分類改訂版および異常行動チェックリスト日本版を用いて調査した。結果、今回検討した大島分類改訂版および異常行動チェックリスト日本版スコアは移行群、非移行群で有意な差はなく、環境因子(地域移行に関する家族の理解と要望)の関与が推定された。今後、地域移行支援・フォローアップシステムを活用することで家族の信頼を得ながら地域生活移行を推進していくことが重要と考える。

2. 軽度～正常境界域の知的障害者の地域生活移行についての研究

発達障害を伴う軽度知的障害者に対しては、従来の発達障害を伴わない知的障害者や知的障害を伴わない発達障害者に対する支援手法とは異なる手法の開発の必要性を考えた。そこで、障害福祉サービスとしての就労移行支援の枠組みに則し、「施設内訓練」、「行事参加」、「職場実習」という3つの場を支援フィールドとして、体験と体験の意味づけの支援を繰り返し行いながら

「自己理解」、「他者理解」、「社会的規範の理解」の促進を図る支援モデルと支援プログラムの開発を行った。この支援モデルにもとづいて6名に対して支援を行った結果、支援継続中の1名を除く5名全員が就職という帰結が得られたほか、支援期間の短縮化が図られるなど、その有用性が示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害成人においては、体験と体験の意味づけをとおした支援を積み重ねることが生活体験の乏しさやイメージをもつことの苦手さ、三段論法などの論理的思考の苦手さを補う支援手法として有効であったことが推察された。研究期間内には6名の検討しか得られなかったが、さらに事例を積み重ねて支援モデルにもとづいた支援の効果検証と、標準的な支援プログラムの策定が今後の課題である。

3. 発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み

開発したアセスメントを就労支援中の発達障害者21名および統制群21名に対して施行し、両群に有意な差を認めた。また発達障害の本人評価と支援者による他者評価では、支援者が当事者の認識よりもニーズを低く見積もっているか、ニーズを拾いきれていないことが示唆された。軽度知的障害を伴う発達障害者の日常生活上の支援ニーズを把握するためには、ある程度構造化した方法で系統的に行う必要があり、また、介入の効果測定をするためには、初期評価時に自己評価と支援者評価の差の傾向を把握しておくことは、重要である。

4. 知的障害者の生活の補完的手段の研究 軽度知的障害を伴う発達障害者の就労に

役立つことが期待される68の個別支援ツールを抽出し、縦軸をICFの心身機能、横軸を活動参加とする支援ツールマップを開発した。

5. 入所重度知的障害者のきょうだいの課題と自己概念

重度群(50例)および軽度群(12例)について、その家族(両親、同胞)を対象に調査を実施した。重度群ではきょうだいの課題は、「(入所前および帰省時における)入所者の家庭での行動」「親亡き後の後見」について多くあげられたが、家族支援のニーズが指摘された項目は、きょうだいから母親からよりも有意に少なかった。また、対照群に比べて母親の自己概念は有意に低かったが、きょうだいと父親の自己概念には有意差はなかった。軽度群については、本人と母親の自己概念は支援後に変化が認められたが、父親ときょうだいには変化は認められず、支援終了後にきょうだいの心配がもっとも高かった項目は「当事者の将来(結婚、住居、仕事)」であった。この結果を受け、重度群のきょうだいに「障害者の将来の生活」に関してパンフレットを作成し提供したところ情報提供への評価は高かった。

F. 研究発表

1. 論文発表

研究成果の刊行に関する一覧表参照

2. 学会発表

- 1) 車谷洋, 深津玲子, 青年期にある発達障害者の体力に関する調査. 第53回日本児童青年精神医学会総会, 東京,

- 2012-11-01
- 2) 鈴木さとみ, 深津玲子, 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究-ICF-Based アセスメントの開発による一考察-, 第 53 回日本児童青年精神医学会総会, 東京, 2012-11-01
- 3) 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 就労移行支援を受けている発達障害成人の運動能力と上肢機能の検討 就労に至った症例から介入指標を考える, 第 6 回日本作業療法研究学会・学術大会, 長崎, 2012-09-23
- 4) 四ノ宮美恵子, 小林菜摘, 深津玲子, 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援() - 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から -, 日本発達障害学会 第 47 回研究大会, 横浜, 2012-08-12
- 5) 小林菜摘, 四ノ宮美恵子, 深津玲子, 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援() - 就労支援モデル検証の試み -, 日本発達障害学会 第 47 回研究大会, 横浜, 2012-08-12, 優秀賞受賞
- 6) 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 小林菜摘, 就労移行支援を要する発達障害成人の上肢機能の調査, 日本発達障害学会 第 47 回研究大会, 横浜, 2012-08-12
- 7) 鈴木さとみ, 四ノ宮美恵子, 深津玲子, 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査-ICF-Based アセスメントの開発と試行による一考察-, 日本発達障害学会, 横浜, 2012-08-12
- 8) 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 小林菜摘, 青年期発達障害者の運動能力に関する研究, 第 46 回日本作業療法会議, 宮崎, 2012-06-16
- 9) 北村弥生, 上田礼子. 入所知的障害者のきょうだいの課題と対処方法, 日本健康心理学会, 2012, 東京.
- 10) 北村弥生. 障がいや病気の子どもの家族ができること. 東京都南多摩保健所, 2012. (講演)
- 11) 深津玲子, 青年期にある発達障害者の地域生活移行支援, 第 107 回日本精神神経学会学術総会, 東京都, 2011-10-27
- 12) 水村慎也, 四ノ宮美恵子, 小林菜摘, 深津玲子, 車谷洋, 青年期発達障害者の地域移行への就労支援に関するモデル事業 支援の実施状況, 日本発達障害学会 第 46 回研究大会, 鳥取大学(鳥取市), 2011-08-20
- 13) 小林菜摘, 四ノ宮美恵子, 水村慎也, 深津玲子, 車谷洋, 青年期発達障害者の地域移行への就労支援に関するモデル事業 小グループによる支援の試み, 日本発達障害学会 第 46 回研究大会, 鳥取大学(鳥取市), 2011-08-20
- 14) 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 水村慎也, 小林菜摘, 青年・成人期にある発達障害者の運動能力, 日本発達障害学会 第 46 回研究大会, 鳥取大学(鳥取市), 2011-08-20
- 15) Satomi Suzuki, Mieko Shinomiya, Reiko Fukatsu, Develop the ICF-Based Assessment to Describe Conditions of Adults with Autism Spectrum Disorders: Identification of the Relevant Categories, 21st Asia-Pacific Social Work Conference,

- Waseda University, Tokyo, 2011,
2011-07-16.
- 16) 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子,
水村慎也, 遠藤明宏, 青年期発達障害
者への作業療法の試み, 第45回日本作
業療法学会, 埼玉, 2011-06-25
- 17) 北村弥生. 青年期発達障害者・両
親・きょうだいに対する就労移行支援
の効果. 日本LD学会, 東京, 2011.
- 18) 北村弥生. 障がいや病気の子ども
の家族へ伝えたいこと. 東京都南多摩
保健所, 2011. (講演)
- 19) 水村慎也, 四ノ宮美恵子, 遠藤明
宏, 植木朋子, 若林耕司, 寺本和正,
加藤禎彦, 近藤和弘, 小林菜摘, 高橋
陽子, 青柳政治, 柴崎今日子, 深津玲
子, 車谷洋, 青年期発達障害者の地域
生活移行への就労支援に関するモデル
事業の報告 個別支援計画とその支援
内容, 第27回国立障害者リハビリテー
ションセンター事業発表会, 所沢市,
2010-12-22
- 20) 深津玲子, 医療 - 福祉連携による
発達障害成人に対する福祉サービス提
供の試み シンポジウム 精神科外来
での発達障害併存症へのアプローチ,
第10回日本外来精神医療学会, 東京,
2010-07-24
- 21) 北村弥生: 青年期発達障害者に対
する就労移行支援訓練の効果、日本発
達障害学会, 2010.9.4.
- G. 知的所有権の出願・取得状況 (予定を
含む。)
なし

| | 年齢 | 性別 | 在籍年数 | 区分 | 診断名 | 入所形態 | 入所理由 | 移行場所 | 種別 |
|----|-----|----|------|----|-----------------|------|------|------|------|
| 1 | 52歳 | 女 | 41年 | — | 知的障害、S L E、全盲 | 契約 | 養育困難 | 栃木県 | 重心施設 |
| 2 | 19歳 | 男 | 3年 | 5 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 3 | 19歳 | 女 | 5年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 4 | 40歳 | 男 | 33年 | 4 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 東京都 | 入所施設 |
| 5 | 28歳 | 男 | 15年 | 5 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 6 | 47歳 | 男 | 40年 | 6 | ダウン症候群 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 7 | 30歳 | 男 | 19年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 8 | 38歳 | 男 | 26年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 9 | 28歳 | 男 | 16年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 群馬県 | 入所施設 |
| 10 | 19歳 | 女 | 4年 | 5 | 知的障害 | 措置 | 養育困難 | 埼玉県 | 家庭 |
| 11 | 20歳 | 男 | 15年 | 6 | ダウン症候群 | 措置 | 養育拒否 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 12 | 26歳 | 男 | 12年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 13 | 22歳 | 男 | 13年 | 6 | 知的障害 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 入所施設 |
| 14 | 40歳 | 男 | 32年 | 6 | ダウン症候群 | 契約 | 養育困難 | 埼玉県 | 重心施設 |
| 15 | 39歳 | 男 | 27年 | 6 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 千葉県 | 入所施設 |
| 16 | 24歳 | 女 | 7年 | 4 | 知的障害、自閉症 | 契約 | 養育困難 | 東京都 | 入所施設 |
| 17 | 35歳 | 女 | 18年 | 6 | 知的障害、アンジェルマン症候群 | 契約 | 養育困難 | 東京都 | 入所施設 |

表 1 本研究期間における地域移行者数

【白紙】

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

| 著者氏名 | 論文タイトル名 | 書籍全体の編集者名 | 書籍名 | 出版社名 | 出版地 | ページ | 出版年 |
|------|---|-----------|------------------------|-----------|-----|---------|------|
| 深津玲子 | 発達障害・高次脳機能障害 | 全国社会福祉協議会 | 社会福祉学習双書 | 全国社会福祉協議会 | 東京 | 127-129 | 2010 |
| 深津玲子 | 医療と福祉、労働、教育との連携のために医療者が知っておくべき基礎知識 ASD成人の社会参加に向けて | 神尾陽子 | 成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル | 医学書院 | 東京 | 79-83 | 2012 |

雑誌

| 発表者氏名 | 論文タイトル名 | 発表誌名 | 巻号 | ページ | 出版年 |
|---|--|-----------------------|-------|---------|------|
| 小倉加恵子、田村徹、鈴木さとみ、車谷洋、東江浩美、鈴木繭子、金樹英、深津玲子、市川宏伸 | 発達障害情報センターによる取り組み | LD研究 | 19(2) | 129-134 | 2010 |
| 深津玲子 | 医療-福祉連携による発達障害成人に対する福祉サービス提供の試み | 日本外来精神医療学会誌 | 11(1) | 28-29 | 2010 |
| 深津玲子 | 青年期にある発達障害者の地域生活移行支援 | 第107回日本精神神経学会学術総会特別号 | | 324 | 2011 |
| 水村慎也、四ノ宮美恵子、小林菜摘、深津玲子、車谷洋 | 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業I - 支援の実施状況 - | 日本発達障害学会第46回研究大会発表論文集 | | 88-89 | 2011 |
| 小林菜摘、四ノ宮美恵子、水村慎也、深津玲子、車谷洋 | 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業II - 小グループによる支援の試み - | 日本発達障害学会第46回研究大会発表論文集 | | 90-91 | 2011 |
| 車谷洋、深津玲子、四ノ宮美恵子、水村慎也、小林菜摘 | 青年・成人期にある発達障害者の運動能力 | 日本発達障害学会第46回研究大会発表論文集 | | 170-171 | 2011 |

| | | | | | |
|---|---|---|-----------|---------|------|
| 花木りさ, 小倉加恵子, 深津玲子, 藤井俊勝 | 人物と位置に関するソース記憶課題の作成 - アスペルガー症候群における社会性の障害の背景を調べるために - | 日本発達障害学会第46回研究大会発表論文集 | | 228-229 | 2011 |
| 深津玲子 | 成人期発達障害者の支援について | 第12回日本言語聴覚学会抄録 | | 59-60 | 2011 |
| Satomi Suzuki, Mieko Shinomiya, Reiko Fukatsu | Develop the ICF-Based Assessment to Describe Conditions of Adults with Autism Spectrum Disorders: Identification of Relevant Categories | 21st Asia-Pacific Social Work Conference -Crossing Borders: Interdependent Living and Solidarity- | | 59 | 2011 |
| 北村弥生, 上田礼子, 柿沼章子 | 血友病患者によるきょうだいに関する感情と経験及び遺伝に関する意識 | 国リ八紀要 | 32 | 印刷中 | 2012 |
| 車谷洋, 深津玲子 | 青年期発達障害者の運動および上肢能力の調査 | 日本作業療法研究学会雑誌 | 14 (2) | 9-15 | 2012 |
| 高橋秀俊, 深津玲子, 神尾陽子 | 成人ADSの社会参加に向けて | 精神科 | 21(6) | 687-691 | 2012 |
| 四ノ宮美恵子, 小林菜摘, 深津玲子 | 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援() - 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から - | 日本発達障害学会第47回研究大会, 発表論文集 | | 131 | 2012 |
| 小林菜摘, 四ノ宮美恵子, 深津玲子 | 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援() - 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から - | 日本発達障害学会第47回研究大会, 発表論文集 | | 132 | 2012 |
| 鈴木さとみ, 深津玲子, 四ノ宮美恵子 | 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査 - ICF-Basedアセスメントの開発と試行による一考察 - | 日本発達障害学会第47回研究大会, 発表論文集 | | 130 | 2012 |
| 車谷洋, 深津玲子, 四ノ宮美恵子, 小林菜摘 | 就労移行支援を要する発達障害成人の上肢機能の調査 - 年代平均値および標準値との比較より - | 日本発達障害学会第47回研究大会, 発表論文集 | | 95 | 2012 |
| 小林菜摘, 四ノ宮美恵子, 深津玲子 | 障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援モデルの検証の試み | 第20回職業リハビリテーション研究発表大会, 発表論文集 | | 335-336 | 2012 |
| 鈴木さとみ, 深津玲子 | 自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する研究 ICF-Basedアセスメントを用いた調査による一考察 | 第53回日本児童青年精神医学会総会, 抄録集 | | 337 | 2012 |

シンポジウム①



深津 玲子 ● 略歴

昭和 58 年 3 月 25 日 東北大学医学部卒業
 昭和 58 年 6 月—
 東北大学医学部神経内科
 平成 10 年 7 月—11 年 8 月
 東北大学医学部高次機能障害学
 平成 10 年 9 月—11 年 7 月
 Baycrest Centre for Geriatric Care,
 Rotman Research Institute (Toronto,
 Canada)
 平成 11 年 9 月—16 年 3 月
 国立療養所宮城病院神経内科医長
 平成 16 年 4 月—18 年 3 月
 独立行政法人国立病院機構宮城病院神経
 内科部長、臨床研究部高次脳機能研究室
 長併任
 平成 18 年 4 月—現職
 平成 18 年 6 月—
 東北大学医学部高次機能障害リハビリテ
 ーション科臨床教授 (併任)
 平成 20 年 10 月 1 日—
 国立障害者リハビリテーションセンター
 研究所 発達障害情報センター長

シンポジウム①

「精神科外来での発達障害
併存症例へのアプローチ」

「医療 - 福祉連携による、発達障害成人
に対する福祉サービス提供の試み」

深津玲子 (国立障害者リハビリテーションセンター
病院 臨床研究開発部 / 研究所 発達障害情報センター)

はじめに

現在、青年期・成人期における発達障害者への支援については、障害者福祉、労働、精神科医療等の領域で取り組みが始まっているが、福祉サービスの支援手法については確立したものがない。また社会的ひきこもりのなかに、明らかな知的障害のない発達障害者がいることが知られ、発達障害者支援センター等では移行支援に苦慮している。

こういった背景をもとに、国立障害者リハビリテーションセンターで

は平成 20 年度より発達障害成人に対する地域生活移行のためのモデル事業を開始した。当事業は、障害福祉制度下において、青年期発達障害者就労移行支援のための地域モデルを構築し、障害福祉サービス事業である自立訓練と就労移行支援を行い、同事業の対象者および支援手法について検討することを目的としている (図 1)。

当事業における医療機関の役割は診断のみでは不十分であり、生活あるいは社会参加への制限の原因となる精神および認知機能の評価、検討、対応が重要となる。今回は発達障害

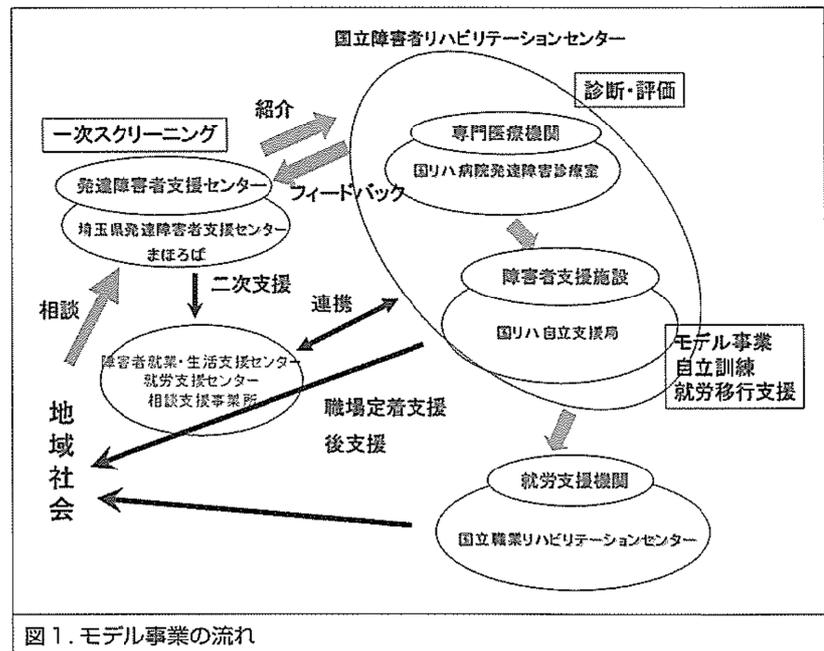


図 1. モデル事業の流れ

シンポジウム①

表 1

| Case | 年齢・性別 | 診断名 | PARS (幼児期/思春期) カットオフ: 9/20 | AQ-J カットオフ : 26 | WAIS | | |
|------|-------|--------|----------------------------------|-----------------------|------|-----|-----|
| | | | | | VIQ | PIQ | FIQ |
| 1 | 21・男性 | PDDNOS | 12/21 | 38 | 77 | 62 | 67 |
| 2 | 28・男性 | 自閉性障害 | 33/17* | 41 | 106 | 97 | 102 |
| 3 | 26・男性 | Asp | 14/21 | 36 | 88 | 70 | 78 |
| 4 | 23・男性 | Asp | 37/37 | 30 | 80 | 83 | 85 |
| 5 | 24・男性 | PDDNOS | 27/22 | 32 | 66 | 72 | 67 |
| 6 | 23・女性 | Asp | 17/22 | 30 | 100 | 84 | 93 |
| 7 | 19・女性 | PDDNOS | 29/26 | 32 | 86 | 83 | 75 |

PDDNOS: 特定不能広汎性発達障害、Asp: アスペルガー障害

者支援センターと医療機関が連携して福祉サービスの適応となる対象について検討する基礎調査について報告した。

方法

発達障害者支援法で定められた「発達障害」をもち、中等教育学校卒業相当以上の学力を持ち、就労、就学を希望するも適切な支援が必要な青年期発達障害者を対象とした。

1. 埼玉県発達障害者支援センターまほろばに就労相談目的で来談した未診断の発達障害疑いの成人にたいし、広汎性発達障害日本自閉症協会評定尺度 (PARS)、高機能自閉症スペクトラム指数 (AQ-J)、生育歴等を含む成人版問診票を一次スクリーニングとして施行し、その後国リハ発達障害診療室にて行った医学的診断との適合について検討した。
2. まほろばにて一次スクリーニングアセスメントを行った事例の相談に要する時間について

てそれ以外の事例と比較した。

3. まほろばにてモデル事業対象者と判断した症例を検討した。

結果

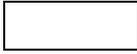
1. まほろばで当事業対象として一次スクリーニングを施行した7例は全例国リハ病院にて発達障害と診断された(表1)。PARS 幼児期得点と AQ-J は全例カットオフ値以上であった。PARS 思春期得点は1例で17点とカットオフ値(20)未満であった。
2. 対象者7例がまほろばに来談した回数は1人が2~3回であった。平成20年度にまほろばが就労移行支援を行ったのべ相談件数は122件で、来談回数は1人が平均4~5回、範囲1~43回であった。
3. 1年間にまほろばがおこなった就労相談は30人で、うち当研究対象として国リハ発達障害診療室に紹介されたのは7例、全例発達障害と診断され、5例が

福祉事業サービス対象とされた。対象外となったのは、うつ状態で精神科治療が優先されると判断した1例と、福祉サービスを経ず、直接雇用支援機関からの就労が可能と判断した1例である。福祉サービス対象とした5例の FIQ は 67~85 であった(表1)。

考察

今回一次スクリーニングとして施行した PARS、AQ-J の結果は診断結果と一致していた。また、発達障害者支援センターにおいて一次スクリーニングを行うことの負担は、相談回数の増加という形では現れず、担当者も負担増加というとなえ方をしていないことが明らかとなった。事前に患者情報として PARS、AQ-J および生育歴を含む問診票が得られたことは、医療機関にとっては大変有益であった。

今回モデル事業対象者は明らかな知的障害を合併しない発達障害者、ということで通常校で教育を受け、高卒程度の学力を有していると言う条件で募集をした。全例この条件を満たしてはいるが、受診後の WAIS 検査では、FIQ67~85 と知的境界域から軽度障害であった。現在発達障害者支援センターで発達障害成人の移行支援を行う際に、雇用支援機関(ハローワーク、地域障害者職業センター等)、福祉就労の事業所(小規模作業所、授産施設等)が選択肢としてあげられる。このどちらにも対象とならない群、すなわち教育歴の中では明らかな知的障害はないが、既存の障害者職業リハビリテーションサービスに適応しにくい知的境界域の発達障害者が、生活訓練・就労移行支援という福祉サービスの適応として想定される可能性があると考えられる。



青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業 - 支援の実施状況 -

水村 慎也¹⁾ 四ノ宮 美恵子¹⁾ 小林 菜摘¹⁾ 深津 玲子²⁾ 車谷 洋²⁾

1) 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

2) 国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 発達障害情報センター

1. はじめに

成人の発達障害者に対する福祉サービスの支援手法については、確立したものが無いのが現状である。当センターでは、青年期にある発達障害者を対象に地域での就労を含めた自立生活を実現するための支援サービスモデルを確立することをねらいとして、平成20年度から3年間モデル事業を実施したので、その実施概要を報告する。

2. 本モデル事業対象者

1) 対象者

埼玉県発達障害者支援センターにて相談の対象となった青年期発達障害者の中から、通所が可能でモデル事業の趣旨、並びに臨床研究への協力について同意した高等学校卒業あるいは同等以上の学力を有する就労を希望している者を対象とした。

2) 対象者の概要

モデル事業の参加者は11名（男性9名、女性2名、平均年齢24.1歳）で、その概要は、以下のとおりであった。

ア. 診断名（DSM-Ⅳによる）

特定不能の広汎性発達障害6名、アスペルガー障害3名、自閉性障害2名であった。

イ. 学歴および職歴

最終学歴は、中学校卒業2名、高等学校卒業4名、専門学校卒業3名、高等専門学校卒業1名、大学卒業1名であったが、うち6名が中途退学者であった。アルバイトを含む職歴がある者は5名であったが、その全員が就労経験を失敗体験として捉えていた。

3. 支援結果

1) 支援期間

訓練実施期間は、3月から22月までと大きなばらつきがみられた。

2) アセスメント結果

ア. 生活リズム

昼夜逆転、睡眠時間の不足等、何らかの生活リズムの課題を有しており、多くは昼夜を問わずネットやゲームに時間を費やしていた。

イ. 健康管理・身辺管理

体調や疲労に配慮しながら行動するなど、結果を予測して自己管理することは共通して困難であった。また、身体バランスの悪さや力を加減するなどの身体調整力の低さも、共通してみられる課題であった。

ウ.コミュニケーション

コミュニケーション行動に関して何らかの課題が認められるという点では、全体に共通しているが、指示理解や表出に関しての特性や課題はまちまちであった。

I.作業能力

職歴の有無に関わらず、日常生活の多様な体験の不足が作業遂行上の支障となっていた。初めて体験する課題では作業速度、作業量などに関して極めて低い結果を示すが、一度体験すると向上していく傾向がみられた。

オ.家族関係

大半の事例でご家族も本人の言動にとまどい、家族としてどのように対応していくべきかわからず苦慮している様子がうかがわれた。

4. 支援内容

当センターは障害福祉サービス事業である自立訓練、並びに就労移行支援を多機能型で実施していることを踏まえて、アセスメント結果に基づき、両サービスの中から必要な支援項目を個別支援計画書に盛り込んで支援を行った。

- 1) 自立訓練（身辺管理、調理、買い物、金銭管理、メモの活用、スケジュール管理、マナー等）
- 2) 就労移行支援
 - ア.技能習得訓練（事務、機械製図、組立、クリーニング）
 - イ.職場体験訓練（郵便物の仕分け、ファイリング、消耗品の在庫管理等、清掃、模擬店出店等）
 - ウ.センター内外職場実習、就労マッチング支援、及び職場定着支援
- 3) 作業療法
- 4) リハビリテーション体育
- 5) 社会的支援（面接、家族や支援機関との連絡・調整等）
- 6) 地域連携（発達障害者支援センター、障害者就業・生活支援センター、ハローワーク等の地域支援機関との連携、定期的な合同カンファレンス開催による個別支援計画の作成）

5. 帰結

医学的理由により訓練中止となった1名を除いた10名の帰結は、就職5名、在宅生活及び就職活動継続2名、進学1名、訓練継続中2名であった。

6. 考察

多様な障害特性や生活歴等の状況から、より個別性に重きをおいたプログラムの提供が必要であった。また、円滑な支援を進める上では、支援開始当初から地域関係機関との連携体制を整え、支援ニーズを共有していくことが有効であった。場面や状況が変化することにより生活上の支援課題があとになってみえてくることも多いことから、自立訓練から就労移行支援へという一方向的な支援の流れにはなじみにくく、同時並行またはスパイラルに展開できる仕組みが必要であると考えられた。多様な課題の背景に生活体験の乏しさがあることが明らかであり、個人内の能力のばらつきが大きいことや、訓練を通して問題解決方略を学習してもその般化が極めて困難であるため、従来の技能習得を前提にした訓練体系では効果が得られにくいことが示唆された。そこで、多様な体験中心の訓練体系へのパラダイムシフトが有効であると考えられた。地域支援機関との連携による長期的な支援体制の構築、職場開拓の強化、並びに家族支援体制の確立が今後の課題である。

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業
 - 小グループによる支援の試み -

小林 菜摘¹⁾ 四ノ宮 美恵子¹⁾ 水村 慎也¹⁾ 深津 玲子²⁾ 車谷 洋²⁾

1) 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

2) 国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター

1. 目的

青年期において初めて発達障害との診断を受けた、当モデル事業の利用者を対象に、「他者と協同して作業をすること」を目的に、文化祭で協同して模擬店を出店するという場面を用いて、小グループ訓練を実施した。そこで、試行した段階的なアプローチによるプログラムの内容と効果について考察する。

2. 方法

1) 対象者

青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業の利用者 A、B、C の 3 名。DMS- による診断名は、それぞれ、特定不能の広汎性発達障害・アスペルガー障害・自閉性障害で、WAIS- による知的機能 (FIQ) は 75 ~ 127 であった。いずれも学校生活において、行事へ役割を持ち主体的に参加する機会を得ておらず、集団での行事に参加することに対して苦手意識を持っていた。

2) 手続き

はじめに、文化祭のイメージを持ちやすいように、導入として、「お菓子を手作りし、いつもお世話になっている職員をもてなす」という作業体験の場を個別に設けた。ここでは、支援員は利用者とは支援者の二者間で協力して調理し、それを第三者に提供しもてなすことで、「他者と協同して作業する」状態と、模擬店の基本的要素である「商品を提供し、客をもてなす」ことを体験的に理解することを目標に介入を行った。次に、模擬店の企画から出店までの一般的な手続きから抽出した表 1 の活動課題に関して、支援員はファシリテーター的役割を担い、表 2 の活動の手続きに則り介入を行った。各活動課題に対しては、課題の特性に応じて課題遂行場面を、話し合いの場を持つグループミーティング、または実際の作業を行うグループ作業に振り分け実施した。

表1. 活動課題

| 活動課題 | 活動課題 | 活動課題 |
|-------------------|-----------------|--------------|
| 1. 模擬店内容と店名の決定 | 9. 店内装飾の製作 | 17. 買い出し |
| 2. 模擬店出店の目標の設定 | 10. 販売方法の決定 | 18. 接客等の事前練習 |
| 3. 活動のルール設定 | 11. 販売に必要な物の作成 | 19. 販売商品の製作 |
| 4. 当日までのスケジュールリング | 12. 展示物の内容の決定 | 20. 開店準備 |
| 5. メニューの詳細の決定 | 13. 展示物の作成 | 21. 当日の活動 |
| 6. メニュー該当品の価格調査 | 14. 宣伝広告の企画 | 22. 閉店後の片付け |
| 7. 諸経費の算出 | 15. 宣伝広告の作成 | 23. 反省会 |
| 8. 店内のレイアウトの決定 | 16. 必要な物のリストアップ | 24. 売り上げの集計 |

表2. グループ活動の手続き

| 内容 | メンバーの達成目標 | ファシリテーターの介入目標 |
|--------------------|---------------------------------------|--|
| 1. セッティング | これから展開する体験について、枠組みと目的を理解する | 協同作業を体験するための、メンバーが主体的に活動できる場面設定を行い、これから展開する体験の枠組みの理解を促す |
| 2. 体験 | 各活動課題に他者と協同で取り組む | できるだけメンバーが主体的に活動し、協同作業が進むようにメンバー間の円滑的役割を果たす |
| 3. 個人の体験の整理 | 体験の全体にわたる人物間の関係や状況について、個人の一環した視点で把握する | 体験の全体にわたる人物間の関係や状況について組織化し、本人個人の一環した視点で整理するための個別の介入を行う |
| 4. 他者の視点を取り入れる | 同じ体験を共有した、他メンバーの自分と異なる視点を受け入れる | メンバーがミーティングで個人の心的体験を語り、同じ場面で相互に異なる心的体験をしていることについての理解を促す |
| 5. 体験の一般的な水準での意味づけ | 「他者と協同で作業する」という体験を一般的な水準で理解する | メンバーが「協同して作業する」状態について、一般的な水準での理解ができるように促す |
| 6. 今後の課題の整理 | 協同作業を成功させるための適応的な行動モデルを構築する | 個人が自身の協同作業をする際の苦手さに気付き、適切な行動モデルを、体験から構築できるように個別の介入を行う |
| 7. フィードバック | メンバーの苦手さや適応的な行動モデルを共有し、他者の意見や工夫を取り入れる | メンバーが、個人の課題と適応的な行動モデルについて語り、相互に適応的な行動についての意見や工夫を共有できるように促す |

・結果

200X年7月～200X年10月の約4ヶ月間に60分を1コマとし、計73コマの介入を行った。その結果、個人差はあるものの表3、表4のような気づきと行動の変化がみられた。そして、文化祭直後にメンバーが記述した感想文には文化祭の心的体験として表5のような記述が見られた。

表3. 協同作業に関する気づき

| 気づき | A - B - C |
|----------------------|-----------|
| 1. 男女差 | ○ ○ ○ |
| 2. 経験の差 | ● ○ ○ |
| 3. 能力の違い | ○ ○ ○ |
| 4. 立場の違い | ○ ○ ○ |
| 5. 相互の行動パターンの特徴 | ○ ○ ○ |
| 6. 相互の役割を理解する必要性 | ● ○ ○ |
| 7. 報告と連絡の必要性 | ○ ○ ○ |
| 8. 作業の区切りを把握する必要性 | ● ○ ○ |
| 9. 作業の分担をあらかじめ決める必要性 | ○ ○ ○ |
| 10. 作業全体の把握の必要性 | ● ● ○ |

注：項目に関する気づきがあったもの
項目に関する気づきがなかったもの

表4. 介入後にメンバーに見られた変化

| 行動 | A - B - C |
|------------------------|-----------|
| 1. 作業時に役割分担をしようとする | ○ ○ ○ |
| 2. 他者の行動によって自分の行動を調整する | ○ ○ ○ |
| 3. 他者の作業スピードに合わせる | ○ ○ ○ |
| 4. 相互に能力を補おうとする | ● ○ ○ |
| 5. 他者の作業状況を把握しようとする | ● ○ ○ |
| 6. 相互の作業スペースを調整する | ● ○ ○ |
| 7. 作業時に報告・連絡をしようとする | ○ ○ ○ |
| 8. 他者を手伝う | ○ ○ ○ |
| 9. 他者に手助けを求める | ● ● ○ |
| 10. 作業の全体を把握しようとする | ● ● ○ |

注：項目に関する変化が見られたもの
項目に関する変化が見られなかったもの

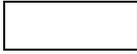
表5. 感想文からの記述

| | |
|---|--|
| A | 「おいしく食べてもらえてとても嬉しかったです」 「当日は沢山の客に買ってもらえたり、接客もうまくできてとても楽しい一日でした」 |
| B | 「お店の流れなどを考えたりして、大変でしたが、お菓子づくりや当日のお店の仕事をやったりしてすごく楽しくできてよかったと思います」 |
| C | 「買ってくれた人もみんな喜んでくれたので大成功と言えるでしょう」 「色々大変なことも多かったけど、楽しかったです。また機会があったらやりたいです」 |

・考察

実際の体験における自己の視点と他者の視点を整理し共有していく手続き(表2の2～4)によって介入したことで、体験の意味付けがなされ、協同作業に関する気づきが挙げられたものと考えられた。さらに、協同作業における個人の行動のフィードバックを行い、適応的な行動モデルを各自の実際の体験から再構築する(表2の5～6)手続きによって、行動の変化が生じたものと考えられた。また、他者と円滑に協同し文化祭に参加したことで、「行事に参加する」という体験が「楽しい体験」につながったものと考えられた。

今後の課題としては、今回のプログラムの結果で得られたような気づきや行動の変化が長期的に定着していくためのプログラムの検討が挙げられる。



青年・成人期にある発達障害者の運動能力

車谷洋¹⁾、深津玲子¹⁾、四ノ宮美恵子²⁾、水村慎也²⁾、小林菜摘²⁾

1) 国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 発達障害情報センター

2) 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局

【はじめに】

学童期にある発達障害児は身体的な不器用さがあり、運動能力が低い傾向にあるとの報告は散見される。また、青年・成人期にある発達障害者（以下、青年期発達障害者）においても、身体的な不器用さがあるとの報告もある。

著者らは、青年期発達障害者に対して就労支援を実施する中で、身体的な不器用さだけでなく、体力や運動能力が低いと考えられる状況もしばしば経験する。しかし、青年期発達障害者の運動能力を調査した報告はなく、その傾向は明らかにされていない。

よって、本研究の目的は、青年期発達障害者の運動能力を調査することである。

【対象と方法】

青年期発達障害者6名（男性5名、女性1名）を対象とした。対象者の年齢は23.0±2.4歳、診断名は特定不能広汎性発達障害が4名、アスペルガー障害が1名、自閉性障害が1名であった。学歴は専門学校卒業が2名、短期大学中退が1名、大学中退が2名、大学卒業が1名であり、職歴はアルバイト経験もない者が4名、アルバイト経験のみの者が1名、常勤経験のある者が1名であった。知能検査結果はVIQが70-116、PIQが54-110、FIQが60-116であり、全例VIQがPIQより高かった。

これらの対象者に対して、運動能力の調査を実施した。運動能力の調査には、文部科学省が実施している体力・運動能力調査の新体力テスト（20-64歳対象）および観察による動作遂行能力の評価を用いた。

体力・運動能力調査の新体力テストは、握力、上体おこし、反復横跳び、長座体前屈、立ち幅跳び、急歩の6種目で構成され、得られた結果は、同年代の平均値と比較した。

観察による動作遂行能力の評価は、青年・成人期では動作遂行が可能である歩行、横歩き、継ぎ足歩行、スキップ動作などを行い、その動作遂行の可否を調査した。

【結果】

体力・運動能力調査の結果より、対象者の運動能力は同年代の平均値よりも低い傾向であることが明らかとなった（図1-6）。また、動作遂行能力の結果から、60～72月齢で達成可能である継ぎ足歩行やスキップ動作が困難な者がいた（表1）。

表1 動作遂行能力

| | 動作可能 | 動作困難 |
|---------------|------|------|
| 歩行 | 6 | 0 |
| 横歩き | 6 | 0 |
| 後歩き | 6 | 0 |
| 継ぎ足歩行 | 4 | 2 |
| スキップ動作 | 2 | 4 |
| 片脚ケンケン(10回連続) | 6 | 0 |

(人)

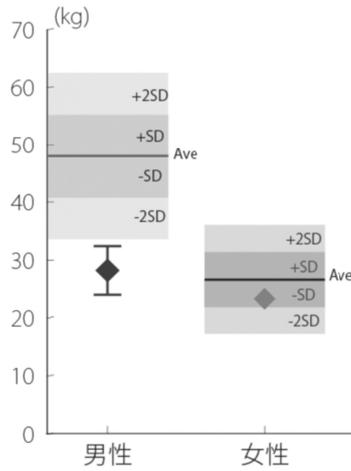
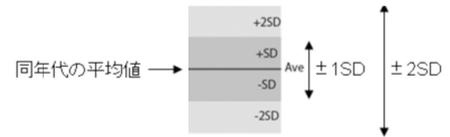


図1 握力

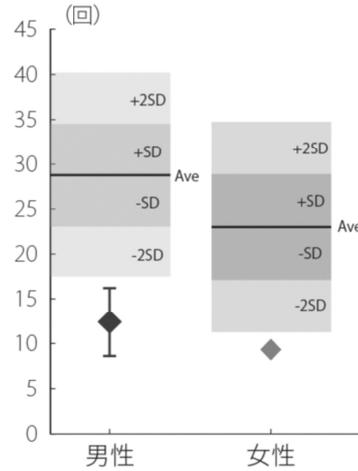


図2 上体おこし

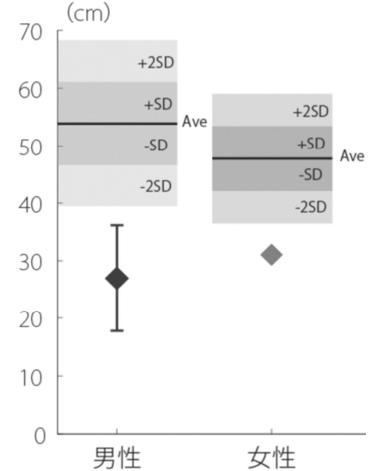


図3 反復横とび

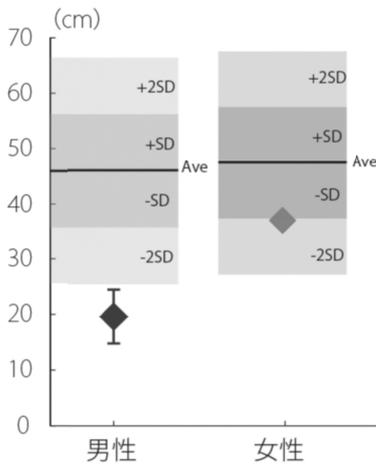


図4 長座体前屈

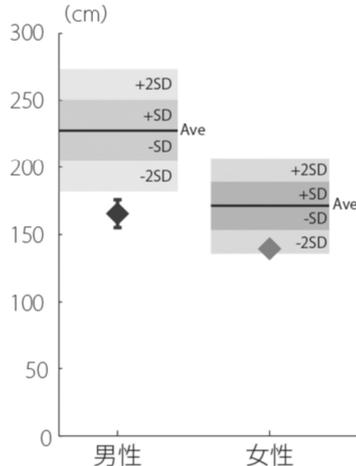


図5 立ち幅跳び

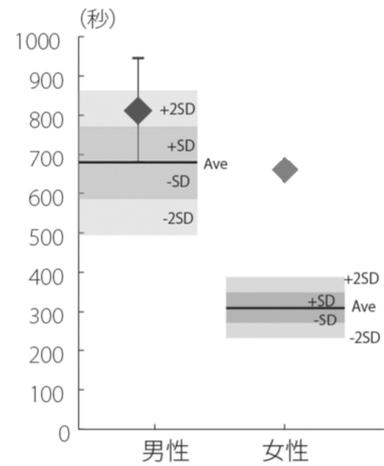


図6 急歩

【まとめ】

青年期発達障害者の運動能力は、同年代の平均的な運動能力よりも低い傾向であることが明らかとなった。また、体力・運動能力調査の各項目で同年代平均値よりも低い傾向を示したことから、青年期発達障害者の運動能力は同年代よりも全般的に低い傾向があると分かった。また、低年齢で動作遂行が可能な動作が行えていない者がいた。以上より、青年・成人期にある発達障害者への介入時には、運動能力への評価および介入も必要であると考えられる。

発達障害者を対象とした小グループでの就労支援に向けた支援プログラムの試み

小林 菜摘（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局 就労支援員）
四ノ宮 美恵子（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局）
水村 慎也（国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局）
深津 玲子（国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター）
車谷 洋（国立障害者リハビリテーションセンター 発達障害情報センター）

1 目的

国立障害者リハビリテーションセンター（以下「国リハセンター」という）では、平成20年度から平成22年度まで、埼玉県発達障害者支援センターまほろば等との連携により、「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業」を実施した。

その中で、当モデル事業の利用者を対象に、「他者と協同して作業をすること」を目的に、文化祭で協同して模擬店を出店するという場面を用いて、小グループ訓練を実施した。そこで、試行した段階的なアプローチによるプログラムの内容と効果について考察する。

尚、この文化祭は自由参加であり、参加者が主体的に企画運営を行うことが求められている。

2 方法

(1) 対象者

モデル事業の利用者A、B、Cの3名。DMS- による診断名は、それぞれ、特定不能の広汎性発達障害、アスペルガー障害、自閉性障害で、WAIS- によるFIQは75～127であった。いずれも学校生活において、行事へ役割を持ち主体的に参加する機会を得ておらず、集団での行事に参加することに対して苦手意識を持っていた。

(2) 手続き

導入

はじめに、文化祭への参加の動機づけを高めることを目的に、「お菓子を手作りし、いつもお世話になっている職員をもてなす」という作業体験の場を個別に設けた。そこでは、支援員は利用者

者に提供しもてなすことで、「他者と協同して作業する」成功体験を得ることと、模擬店の基本的な要素である「商品を提供し、客をもてなす」ことを体験的に理解することを目標に介入を行った。

さらに、その他者と協同作業する成功体験をもとに、文化祭の参加への目的を明確化するための、個別の話合いの場面を設けた。

グループ介入

つぎに、模擬店の企画から出店までの一般的な手続きから抽出した表1の活動課題に関して、支援員はファシリテーター的役割を担い、図2の介入の手続きに則り行った。各活動課題に対しては、課題の特性に応じて課題遂行場面を、話し合いの場を持つグループミーティング、または実際の作業を行うグループ作業に振り分け実施した。また、ファシリテーターの役割を担う支援員は、各段階において図3のメンバーの達成目標にそって介入を行った。

表1 活動課題

| | |
|-------------------------|--------------|
| 企画(模擬店内容と店名の決定、目標の決定) | 展示物の内容の決定と作成 |
| 活動のルール設定と当日までのスケジュールリング | 宣伝広告の企画と作成 |
| メニューの決定と諸経費の算出 | 買い出し等事前準備 |
| レイアウトの決定と装飾制作 | 文化祭当日の作業 |
| 販売方法の決定と必要な様式の作成 | 反省会と売上の集計 |

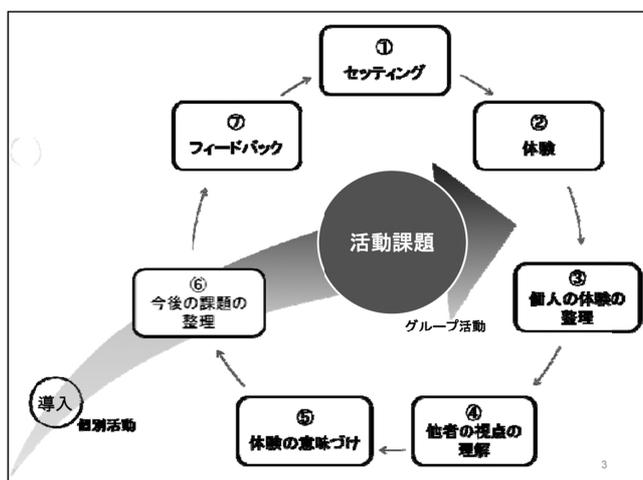


図2 介入の手続き

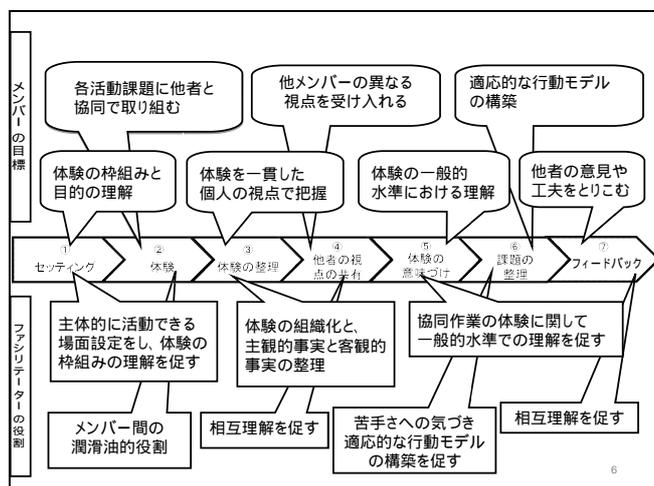


図3 各段階における介入目標

3 結果

平成2X年7月年10月の約4ヶ月間に60分を1コマとし、計73コマの介入を行った。その結果、個人差はあるものの表2、表3のような気づきと行動の変化がみられた。そして、文化祭直後にメンバーが記述した感想文に表5のような記述が見られた。

表2 協同作業に関する気づき

| 気づき | A - B - C |
|----------------------|-----------|
| 1. 男女差 | ○ ○ ○ ○ |
| 2. 経験の差 | ● ○ ○ ○ |
| 3. 能力の違い | ○ ○ ○ ○ |
| 4. 立場の違い | ○ ○ ○ ○ |
| 5. 相互の行動パターンの特徴 | ○ ○ ○ ○ |
| 6. 相互の役割を理解する必要性 | ● ○ ○ ○ |
| 7. 報告と連絡の必要性 | ○ ○ ○ ○ |
| 8. 作業の区切りを把握する必要性 | ● ○ ○ ○ |
| 9. 作業の分担をあらかじめ決める必要性 | ○ ○ ○ ○ |
| 10. 作業全体の把握の必要性 | ● ● ○ ○ |

(注) :当該項目に関する気づきが見られたもの
:当該項目に関する気づきが見られなかったもの

表3 介入後に見られた変化

| 行動 | A - B - C |
|------------------------|-----------|
| 1. 作業時に役割分担をしようとする | ○ ○ ○ ○ |
| 2. 他者の行動によって自分の行動を調整する | ○ ○ ○ ○ |
| 3. 他者の作業スピードに合わせる | ○ ○ ○ ○ |
| 4. 相互に能力を補おうとする | ● ○ ○ ○ |
| 5. 他者の作業状況を把握しようとする | ● ○ ○ ○ |
| 6. 相互の作業スペースを調整する | ● ○ ○ ○ |
| 7. 作業時に報告・連絡をしようとする | ○ ○ ○ ○ |
| 8. 他者を手伝う | ○ ○ ○ ○ |
| 9. 他者に手助けを求める | ● ● ○ ○ |
| 10. 作業の全体を把握しようとする | ● ● ○ ○ |

(注) :当該項目に関して変化が見られたもの
:当該項目に関して変化が見られなかったもの

表4 各段階における介入目標

| | |
|---|--|
| A | 「おいしく食べてもらえてとても嬉しかったです」 「当日は沢山の客に買ってもらえたとし、接客もうまくできてとても楽しい一日でした」 |
| B | 「お店の流れなどを考えたりして、大変でしたが、お菓子づくりや当日のお店の仕事をやったりしてすごく楽しくできてよかったですと思います」 |
| C | 「買ってくれた人もみんな喜んでくれたので大成功と言えるでしょう」 「色々大変なことも多かったけど、楽しかったです。また機会があったらやりたいです」 |

4 帰結の状況

対象者3名は、いずれも14ヶ月～15ヶ月の当モデル事業の利用期間を経て、Aはライン作業を中心とした職場に、Bは軽作業と事務処理を含んだ定型業務をグループで行う職場に、Cは事務職員としてそれぞれ就職した。個人差はあるものいずれも職場での大きな問題はなく、就労を継続している。

5 考察

導入において、他者と協同作業する成功体験を基に、文化祭の参加への目的を明確化するための、個別の話合いの場面を設けたことにより、文化祭で模擬店を出店することへの肯定的イメージが構築され、その後のグループ活動への参加意欲が高まったものと考えられた。

グループ介入においては、段階的に文化祭参加の実際の体験における自己の視点と他者の視点を整理し共有していく手続き(図2の2～4)によ

て介入したことで、体験の意味付けがなされ、協同作業に関する気づきが拳がったものと考えられた。そして、協同作業における個人の行動のフィードバックを行い、適応的な行動モデルを各自の実際の体験から再構築する（図2の5～6）手続きによって、行動の変化が生じたものと考えられた。

また、それらの協同作業における気づきや行動の変化が生じたことにより、他者と円滑に協同し文化祭に参加し役割を遂行できたことが、「行事に参加する」という体験が「楽しい体験」につながったものと考えられた。

対象者の帰結状況からは、他者と協同して作業をするという成功体験を得たことにより、他者からの働きかけを肯定的に受け入れられるようになったことが、その後の就職活動に良い影響をもたらし、就労につながったものと考えられた。

さらに、就労マッチング支援においては、本人の作業能力、適性に加えて、今回の支援プログラムで得られた個人の集団場面での行動特性を踏まえて、職場環境の選択を行った。その結果、個人差はあるものの、無理なく就労が継続されている。このことから、このような支援プログラムを行うことが、就労のマッチングをする上で有益な、集団活動場面でのアセスメントとなる可能性が示唆された。

今後の課題としては、今回の支援プログラムの結果で得られたような気づきや行動の変化が長期的に定着していくためのプログラムの検討と、気づきや行動の変化を促すことが困難であった項目に関する検討が挙げられる。

障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（ ）

- 青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業から -
四ノ宮美恵子 小林菜摘 深津玲子
(国立障害者リハビリテーションセンター)
就労移行支援 就労支援モデル 体験学習

【はじめに】

発達障害者の就労支援に関しては、労働施策の中ですでに様々な取り組みがなされてきているが、発達障害者支援センターや障害者就業・生活支援センターなどにおける成人期発達障害者の相談内容として、依然就労に関することが高い割合を占めており、今後は就労移行支援事業での取り組みに対するニーズも高くなっていくことが予想される。しかしながら、障害福祉サービスとしての支援手法については、確立したものが少ないのが現状である。

そこで、国立障害者リハビリテーションセンターにおいて実施した「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業」の実践にもとづいて、障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルを考案したので、それを報告するとともに今後の課題について考察する。

【支援モデル考案までのプロセス】

「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業（以下、モデル事業）」の参加者11名に対して、アセスメント結果を踏まえて個別支援計画を作成し、就労移行支援を中心としたサービスの提供を行った。これらの過程の中で、支援ニーズの抽出、ニーズに対する支援プログラムの試行、モニタリングをとおした支援プログラムの修正と支援プログラムの体系化などを経て、支援モデルを考案した。支援ニーズについては、ICFの「活動と参加」および「環境因子」にもとづいて抽出を行ったうえで、「就労」を支援目標として、支援ニーズから下位目標の設定と支援プログラムの整備を行った。

<対象者の概要>

モデル事業に参加した18歳から38歳までの男性9名、女性2名の計11名（平均年齢24.1歳）。DSM-による診断名は、特定不能の広汎性発達障害6名、アスペルガー障害3名、自閉性障害2名であった。知的には、PIQで70未満が4名、境界級が3名、平均下範囲が2名、平均以上は2名であった。最終学歴は、中学卒業から大学卒業までであったが、うち6名が中途退学者であった。職歴のある者は、アルバイトを含めると5名であった。うち、常用雇用による就労経験がある者は2名であったが、いずれも就労期間は2年未満であった。

【アセスメント結果】

1. 支援ニーズ

<活動と参加>

- (1) 学習と知識の応用に関すること
- (2) 一般的な課題と要求に関すること
- (3) コミュニケーションに関すること
- (4) 運動・移動に関すること
- (5) セルフケアに関すること
- (6) 家庭生活に関すること
- (7) 対人関係に関すること
- (8) 主要な生活領域に関すること

<環境因子>

- (1) 自然環境と人間がもたらした環境変化
- (2) 支援と関係
- (3) 態度

【就労支援の下位目標設定】

支援プログラムを整備するにあたり、「就労」という上位目標の下で、それを達成するために必要と考えられる3つの下位目標を設定した。

自己理解 他者理解 社会的規範の理解

【支援内容】

日常生活訓練 作業療法 職業訓練 職場体験訓練
職場実習 就労マッチング支援 スポーツ訓練 心理社会的支援（面接、家族支援、生活環境整備の支援など）
地域支援機関との連携

【支援プログラム実施上の課題】

「就労」という上位目標と3つの下位目標の下で、支援ニーズに対して、「どの場面で」「誰が」「どのように」介入するかを検討し、順次支援プログラムを整備し試行した。試行の結果、以下のプログラム実施上の共通課題が明らかとなった。

- (1) 身辺管理から作業上の課題に至る支援ニーズの多様性
- (2) 知識学習の汎用性の低さ
- (3) イメージの持ちにくさ
- (4) 明快で統一した支援の文脈の必要性
- (5) 体験学習の有用性と体験の振り返りによる意味づけの支援の必要性
- (6) 運動介入の必要性

【支援モデルの考案】

支援チームメンバーの協議によって、就労支援のモデルを考案した。支援モデルの構成は以下のとおりである。

- (1) 「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面を支援のフィールドとする
- (2) 「働くために（就労）」という統一した支援の文脈設定
- (3) 「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」を下位目標とした支援プログラムの設定
- (4) 体験学習と意味づけの支援を核とした支援プログラムの設定
- (5) 各下位目標に対して、らせん状の支援プログラムの設定
- (6) 地域支援機関との連携

【帰結状況】

訓練継続中の1名を除いた10名の帰結状況については、就職6名、大学進学1名、就職活動継続1名、家庭復帰1名、医学的判断による訓練中止が1名であった。

【考察】

モデル事業参加者に対する就労移行支援の試行によって、障害福祉サービスにおける就労支援モデルを考案した。その結果、支援者側の支援の文脈が統一され、就職を帰結とする一定の成果が得られたものと考えられた。

支援モデルに基づいた支援の効果検証と、標準的な支援プログラムの策定が今後の課題である。

【文献】

世界保健機構（WHO）（2008）、国際生活機能分類，中央法規

障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援（ ）

- 就労支援モデルの検証の試み -

小林菜摘 四ノ宮美恵子 深津玲子
 (国立障害者リハビリテーションセンター)
 就労移行支援 就労支援モデル 体験学習

【目的】

国立障害者リハビリテーションセンターで実施した「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業（以下、モデル事業）」では、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場면을支援のフィールドとし、「働くために(就労)」という統一した支援の文脈設定のもと、「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」を体験的に理解することを下位目標とした、らせん状の支援プログラムを試行してきた。それらを、障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルとして考案した。本研究では、事例検討による就労支援モデルの有用性を検証することを目的とした。

【方法】

(1) 事例概要

モデル事業利用者 A。男性。20代前半。DMS- による診断名は、特定不能の広汎性発達障害で、WAIS- の結果はVIQ=96、PIQ=79、FIQ=87であった。また最終学歴は大学卒業で、アルバイトを含む就労経験を有していなかった。

訓練開始時においては、就労を希望するという発言はあったものの、就労への動機付けを持っていなかった。

(2) 手続き

就労支援モデルの検証にあたっては、利用開始から15ヶ月の支援期間を、表1のように支援における主たる体験場面の設定に沿って5つの過程に区分した。そして、訓練の一環として、一ヶ月毎に支援過程における振り返りを記述してもらった作文をもとに、各期毎の作文の記述から、単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出し、KJ法の手順に則ってカテゴリー化した。(グルーピング、カテゴリー化に関しては、支援場面に関与していない心理職に依頼した。)

なお、個人情報保護のため、事例の特性を理解する上で支障のない範囲で、個人が特定されるおそれのある記述については修正を加えた。

表1 支援過程の区分

| 区分 | 期間 | 主な訓練内容 |
|-----|-----------|---------------------|
| 第1期 | 0ヶ月～3ヶ月 | アセスメント 施設内訓練(個別) |
| 第2期 | 4ヶ月～8ヶ月 | 行事参加 |
| 第3期 | 9ヶ月～11ヶ月 | 職場実習(3回) |
| 第4期 | 12ヶ月～13ヶ月 | 施設内訓練(グループ) |
| 第5期 | 14ヶ月～15ヶ月 | 就職活動 |

【結果】

手続きに示した手順に従って、作文から単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出した結果、語りの総数は109個であった。それらは、表2のようなカテゴリーに統合された。

表2 各支援過程において抽出されたカテゴリー

| 区分 | カテゴリー |
|-----|---------------------|
| 第1期 | 自己に対する過大評価 |
| | 他者に対する過度な要求 |
| 第2期 | 他者との受身的な相互作用 |
| | 他者への肯定的関心 |
| | 主観的事実と客観的事実の乖離への戸惑い |
| 第3期 | 限定的な近未来への展望 |
| | 社会的規範の認知 |
| | 社会的基準に基づいた自己認識 |
| | 社会的対応の必要性の認識 |
| | 自己の成長への気づき |
| 第4期 | 漠然とした自己の課題設定 |
| | 漠然とした将来像への言及 |
| | 体験から拡大した希望 |
| | 社会的規範の体験的学習 |
| | 他者との能動的な相互作用 |
| | 他者との意志疎通の困難さへの言及 |
| 第5期 | 内省 |
| | 具体的な自己の課題の設定 |
| | 自立への言及 |
| | 自己の客観的評価 |
| | 就労に向けた自発的な課題設定 |
| 第5期 | 日常生活における自発的な課題設定 |
| | 自己の特徴への関心 |

【考察】

KJ法に則って作文における語りを分析した結果、本事例においては、支援モデルの下位目標である「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」に関する体験的理解が得られたことがうかがわれた。

このことから、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面による支援を通して、社会的文脈における各下位目標に関して肯定的変化が見られたと考えられ、就労支援モデルの有用性が検証された。

さらに、支援事例を積み上げて、就労支援モデルの有用性の検証を行うことが今後の課題である。

就労支援を要する青年期発達障害者の 上肢機能の調査

— 年代平均値および標準値との比較より —

○車谷 洋

深津玲子 四ノ宮美恵子 小林菜摘

(広島大学大学院医歯薬保健学研究院)

(国立障害者リハビリテーションセンター)

KEY WORDS: 青年期発達障害、上肢機能、就労

【問題の所在と目的】

青年期発達障害者に対して就労支援を行う時に、様々な作業訓練を実施することがある。その作業訓練の中で、上肢の協調性や巧緻性が低下していると考えられる症例をしばしば経験する。しかしながら、青年期発達障害者の上肢機能に関する報告は散見されず、同年代と同程度の上肢機能であるのか、就労レベルの上肢機能であるのか、未だ明らかになっていない。

よって、本研究の目的は、就労支援を要する青年期発達障害者の上肢機能の横断的評価を実施し、上肢機能の特徴を捉えることである。

【方法】

就労支援を受けている青年期発達障害者8名を対象とした。対象者は全例男性であり、平均年齢は 23.8 ± 2.1 歳であった。

診断名は特定不能広汎性発達障害が2名、アスペルガー障害が1名、自閉性障害が5名であった。知能検査結果はVIQが平均91.4、PIQが平均78.8、FIQが平均84.4であった。

これらの対象者の上肢機能を調査するために、握力、ピンチ力、簡易上肢機能検査、パーデュープラグボードテストを実施した。また、上肢の感覚機能の調査として、Semmes Weinstein Monofilament テスト、二点識別覚検査を実施した。得られた結果は対象者と同年代の平均値もしくは標準値と比較した。

なお、本研究は国立障害者リハビリテーションセンター倫理委員会の承認を受けた研究事業の一環として行い、対象者および家族より書面による同意を得た。

【結果】

握力の結果は 27.2 ± 4.0 (kg) であり、年代の平均値よりも低く、年代の平均値から2標準偏差を減じた値よりも低い傾向であった。

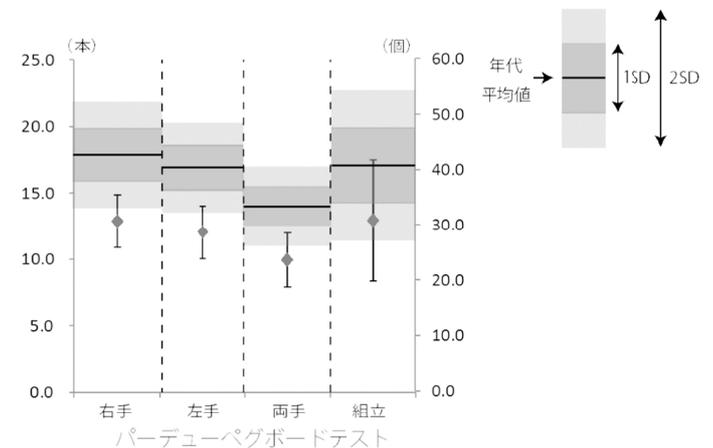
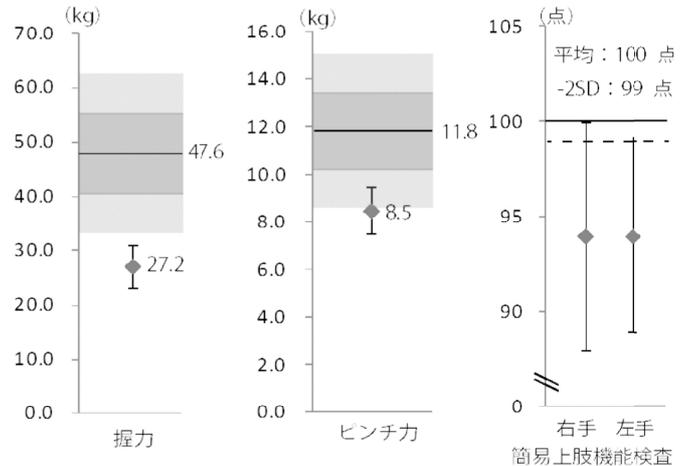
ピンチ力の結果は 8.5 ± 1.0 (kg) であり、年代の平均値よりも低い傾向であった。

簡易上肢機能検査の結果は右手 94 ± 6 (点)、左手 94 ± 5 (点) であり、年代の標準値よりも低く、年代の標準値から2標準偏差を減じた値よりも低い傾向であった。

パーデュープラグボードテストの結果は右手 13 ± 2 (本)、左手 12 ± 2 (本)、両手 10 ± 2 (本)、組立 31 ± 11 (個) であり、同年代の会社での生産的作業に関わる従業員の平均値よりも低い傾向であった。

Semmes Weinstein Monofilament テストの結果は全例で正常範囲であった。

二点識別覚検査の結果は1例のみ軽度異常を認めたが、7例は正常であった。



【考察】

青年期発達障害者の上肢機能は、同年代の平均的な上肢機能に比べ、握力、ピンチ力、簡易上肢機能検査、パーデュープラグボードテストの全てで低い傾向にあった。一方、感覚検査は正常範囲内であった。

握力は全般的な体力を示すと考えられているが、本研究の結果より、青年期発達障害者の体力は低いものと考えられ、就労レベルより低いものと考えられた。簡易上肢機能検査は協調性を、ペグボードテストは巧緻性を評価できる。本研究の結果より、青年期発達障害者の協調性や巧緻性は同年代の平均よりも低い傾向にあることが分かった。さらに、ペグボードテストの結果より、巧緻性は作業レベルよりも低い可能性があることが分かった。他方、感覚検査は正常範囲であった。よって、青年期発達障害者で確認された上肢機能の低下は、感覚による低下ではなく、協調性や巧緻性などで必要な微細運動機能の低下である可能性が考えられる。

就労支援の実施に際して、青年期発達障害者の上肢機能の評価および介入が必要であると示唆された。

発達障害者の就労支援モデルの検証の試み

- Aさんの事例を通して -

小林 菜摘 (国立障害者リハビリテーションセンター 就労支援員)

四ノ宮 美恵子 (国立障害者リハビリテーションセンター)

深津 玲子 (国立障害者リハビリテーションセンター)

1. はじめに

発達障害者の就労支援に関しては、労働施策の中ですでに様々な取り組みがなされてきているが、発達障害者支援センターや障害者就業・生活支援センターなどにおける成人期発達障害者の相談内容として、依然就労に関することが高い割合を占めており、今後は就労移行支援事業での取り組みに対するニーズも高くなっていくことが予想される。しかしながら、障害福祉サービスとしての支援手法については、確立したものが少ないのが現状である。

そこで、国立障害者リハビリテーションセンターにおいて実施した「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業」の実践にもとづいて、障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルを考案した。

(1) 就労支援モデルについて

【支援モデル考案までのプロセス】

「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業(以下、モデル事業)」の参加者11名に対して、アセスメント結果を踏まえて個別支援計画を作成し、就労移行支援を中心としたサービスの提供を行った。これらの過程の中で、支援ニーズの抽出、ニーズに対する支援プログラムの試行、モニタリングをおとした支援プログラムの修正と支援プログラムの体系化などを経て、支援モデルを考案した。支援ニーズについては、ICFの「活動と参加」および「環境因子」にもとづいて抽出を行ったうえで、「就労」を支援目標として、支援ニーズから下位目標の設定と支援プログラムの整備を行った。

【支援モデルの考案】

支援チームメンバーの協議によって、就労支援のモデルを考案した。支援モデルの構成は以下のとおりである。

(1)「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面を支援のフィールドとする

(2)「働くために(就労)」という統一した支援の文脈設定

(3)「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」を下位目標とした支援プログラムの設定

(4)体験学習と意味づけの支援を核とした支援プログラムの設定

(5)各下位目標に対して、らせん状の支援プログラムの設定

(6)地域支援機関との連携

【帰結状況】

訓練継続中の1名を除いた10名の帰結状況については、就職6名、大学進学1名、就職活動継続1名、家庭復帰1名、医学的判断による訓練中止が1名であった。

2. 目的

本研究では、先に述べた障害福祉サービスにおける発達障害者の就労支援の1モデルの有用性を、事例検討により検証することを目的とした。

3. 方法

(1) 事例概要

モデル事業利用者A。男性。20代前半。DMS- による診断名は、特定不能の広汎性発達障害で、WAIS- の結果はVIQ=96、PIQ=79、FIQ=87であった。また最終学歴は大学卒業で、アルバイトを含む就労経験を有していなかった。

訓練開始時においては、就労を希望するという発言はあったものの、就労への動機付けを持っていなかった。

(2) 手続き

就労支援モデルの検証にあたっては、利用開始から15ヶ月の支援期間を、表1のように支援における主たる体験場面の設定に沿って5つの過程に区分した。そして、訓練の一環として、一ヶ月毎に支援過程における振り返りを記述してもらった作文をもとに、各期毎の作文の記述から、単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出し、KJ法の手順に則ってカテゴリー化した。(グルーピング、カテゴリー化に関しては、支援場面に参与していない心理職に依頼した。)

なお、個人情報保護のため、事例の特性を理解する上で支障のない範囲で、個人が特定されるおそれのある記述については修正を加えた。

表1 支援過程の区分

| 区分 | 期間 | 主な訓練内容 |
|-----|-----------|---------------------|
| 第1期 | 0ヶ月～3ヶ月 | アセスメント 施設内訓練(個別) |
| 第2期 | 4ヶ月～8ヶ月 | 行事参加 |
| 第3期 | 9ヶ月～11ヶ月 | 職場実習(3回) |
| 第4期 | 12ヶ月～13ヶ月 | 施設内訓練 (グループ) |
| 第5期 | 14ヶ月～15ヶ月 | 就職活動 |

3. 結果

手続きに示した手順に従って、作文から単なる事実の記述を除外した語りを文章単位で抽出した結果、語りの総数は109個であった。それらは、表2のようなカテゴリーに統合された。

表2 各支援過程において抽出されたカテゴリー

| 区分 | カテゴリー |
|-----|-----------------------|
| 第1期 | 自己に対する過大評価 |
| | 他者に対する過度な要求 |
| 第2期 | 他者との受身の関わり |
| | 他者への肯定的関心 |
| | 主観的事実と客観的事実の乖離からくる戸惑い |
| | 限定的な近未来への展望 |
| 第3期 | 社会的規範の認知 |
| | 社会的対応の必要性の認識 |
| | 自己の成長への気づき |
| | 漠然とした自己の課題設定 |
| | 漠然とした将来像への言及 |
| 第4期 | 社会的規範の体験的学習 |
| | 他者との能動的な関わり |
| | 他者との意志疎通の困難さへの言及 |
| | 内省 |
| | 具体的な自己の課題設定 |
| | 体験から拡大した希望 |
| 第5期 | 自己の客観的評価 |
| | 自己の特徴への関心 |
| | 自立への言及 |
| | 就労に向けた自発的な課題設定 |
| | 日常生活における自発的な課題設定 |

4. 考察

KJ法に則って作文における語りを分析した結果、本事例においては、支援モデルの下位目標である「自己理解」「他者理解」「社会的規範の理解」に関する体験的理解が得られたことがうかがわれた。

このことから、「施設内訓練」「行事参加」「職場実習」の3つの体験場面による支援を通して、社会的文脈における各下位目標に関して肯定的変化が見られたと考えられ、就労支援モデルの有用性が検証された。

さらに、支援事例を積み上げて、就労支援モデルの有用性の検証を行うことが今後の課題である。

自閉症スペクトラム障害者の社会生活機能に関する調査

ICF-Based アセスメントの開発と試行による一考察

鈴木さとみ*

深津玲子*

四ノ宮美恵子**

(*国立障害者リハビリテーションセンター 研究所 発達障害情報・支援センター) (**同 自立支援局)

KEY WORDS: 国際生活機能分類 自閉症スペクトラム障害 社会生活機能

(1行空き)

【問題の所在と目的】

障害者基本法をはじめとする障害福祉サービスの法体系において、発達障害が精神障害に含まれることが明記された。また、発達障害者に必要な福祉サービスを聞いた調査¹⁾では、「市町村相談支援事業」や「就労移行支援」、「就労継続支援 A 型、B 型」の必要性の高さが示されており、福祉サービス事業所における成人期の発達障害者の利用の増加が予想される。障害のある人が就労し継続するためには、仕事上のパフォーマンスに加え日常生活が安定して営めていることがキーポイントとなる。しかしながら、発達障害者は自身の日常生活上の困り感、ニーズの認知や表現などに困難を伴う場合が多いことも一因し、彼らの特性や支援ニーズの把握については支援者の支援経験やスキルに依存する傾向にある。

障害者自立支援法では、指定障害福祉サービス事業者に個別支援計画の作成及び、これを基にしたサービスの提供、モニタリング・評価の実施により利用者に対して適切で効果のあるサービスを提供することが義務付けられているが、実際のところ、支援者間や支援者・利用者間において利用者の社会生活機能に関して共通言語を提供するアセスメントツールはなく、支援ニーズや課題が共有化されにくいという状況が生まれている。国際生活機能分類 (International Classification of Functioning, 以下 ICF) は、専門家間だけでなく、障害のある利用者や家族にとっても理解しやすい言語媒体として用いることができるように作成されている。また、ICF の活動と参加の項目は個人的及び社会的な生活機能について系統的に分類されており、かつ支援ニーズの測定に採用可能なツールである。

そこで、本研究は自閉症スペクトラム障害 (以下 ASD) 者の日常生活機能を系統的に把握することによって、より特性に合わせたサービスを提供することに資するようなアセスメントシートを開発することを目的とした。研究の第 1 フェーズとしてアセスメントシートを作成した。第 2 フェーズとして、第 1 フェーズで作成したアセスメントシートを使用して ASD の診断のある成人と診断のない成人の社会生活機能に差異があるかどうか調査し比較することとした。

【方法】

対象: 対象は、障害者自立支援法の就労移行支援事業を受給中または過去に経験したことのある ASD 男性 (ASD 群) 6 名 (平均年齢 24.8±2.3) 及びその支援者、統制群として、高等学校普通教育課程を終了した 18 歳以上の発達障害の診断のない男性 10 名 (平均年齢 22.7±3.3) である。

方法 1: ICF をベースにした質問紙調査を作成するため、開発手続きに準じ、先行研究のレビュー及び臨床家による検討を行った。

方法 2: ASD 群と統制群に対し、SRS-A (対人応答性尺度) 及び ICF に基づいて作成したアセスメントシート (以下 ICF-Based アセスメント) を質問紙調査及び半構造化面接にて実施した。また、他者評価として ASD 者の支援者に ICF-Based アセスメントを依頼した。上記 3 群のそれぞれの ICF-Based アセスメントのトータルスコア及び主要項目、各下位項目の差から発達障害者の社会生活機能について検討し

た。また、ASD 群と支援者群の自己評価と他者評価の差を調べた。

倫理的配慮: 本研究については、国立障害者リハビリテーションセンターにおける倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

【結果】

結果 1: 文献レビューでは、19 のキーワードを用いた検索の結果、PubMed で 203 本、コクランで 724 本の論文がヒットした。レビューの結果、32 件の論文が該当した。これらの文献から ICF の活動と参加及び環境因子に該当する記述を抜粋した結果、活動と参加の第 2 レベルカテゴリーで 46 項目が、第 3 レベルカテゴリーで 36 項目が抽出された。また、環境因子については第 2 レベルカテゴリーで 14 項目抽出された。抽出された項目と就労移行支援事業を利用中の発達障害者の一次資料をもとに ICF に基づくアセスメントを作成した。回答については、VAS (Visual analog scale) を用いたが、一部については選択式の回答項目にした。環境因子の使用については、統計的使用の合意が得られていないため自由記述を併用した。

結果 2: ASD 群及び対象群の自己評価について、方法 1 で作成した ICF-Based アセスメントのトータルスコア及び主要項目、各下位項目の差を検討したところ、総得点と第 1 レベル分類の「学習と知識の応用」「一般的な課題と要求」「コミュニケーション」「セルフケア」「家庭生活」「対人関係」の項目で、いずれも ASD 者の得点が有意に高かった (セルフケア: $p < 0.05$, 他: $p < 0.01$,)。ASD 群と支援者群で自己評価と他者評価に差があるのか検討したところ、統計上の有意差はなかった。

【考察】

ICF をベースにしたアセスメントの試行調査結果は、発達障害者は統制群よりも社会生活上の活動や参加に制限があると感じていることを示していた。また、発達障害者自身よりも支援者の方が、発達障害者は活動・参加の制限があると評価をしていた。今回の調査は ASD 者のサンプル数の少なさという限界はあったものの、ASD 者の実際の社会生活上の活動制限と参加制約を反映した結果と考えられる。今後さらに症例数を増やし検討したい。

【文献】

1) 特定非営利活動法人自閉症サポートセンター (2012) 発達障害のある人の障害者自立支援法のサービス利用実態に関する調査, 平成 23 年度障害者総合福祉推進事業報告 障害者福祉研究会 (2008) ICF 国際生活機能分類-国際障害分類改訂版- 世界保健機構 (WHO), 中央法規

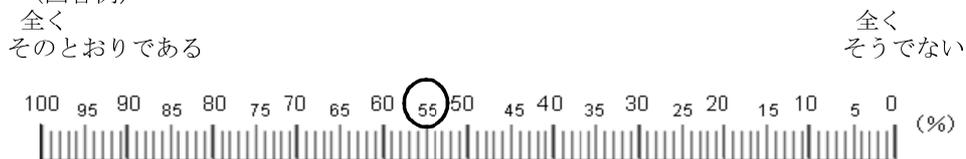
なお、本研究は平成 21, 22 年度 厚生労働科学研究補助金 研究「知的障害者の地域生活移行に関する支援についての研究」(主任研究者 深津玲子) の分担研究「発達障害者支援のための ICF-Based アセスメント開発の試み (四ノ宮美恵子)」の研究協力として実施された。

ICF（国際生活機能分類）をもとにした活動・参加に関する調査

【回答について】

各質問について、あなたの言動や現在の生活状況にどの程度あてはまるかをお答えください。目盛りのある回答欄は、100%を「全くそのとおりである」、0%を「全くそうではない」として、最も近いと思う目盛りを選んで○で囲んでください。

(回答例)



回答番号 34, 36, 46, 47, 63, 69, 71については、最も近い番号を選んで○で囲んでください。

回答番号 70, 73については当てはまる場合は、記述でご回答ください。

「経験」欄については、経験のない場合に☑を入れてください。

「支援」欄については、家族や支援者、支援機器等の支援を受けている場合に☑を入れてください。

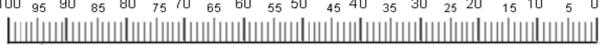
ご本人氏名 _____

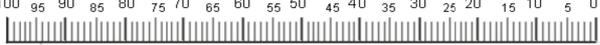
年齢： _____ 歳 性別： 男・女

回答者氏名 _____

記入日：平成 _____ 年 _____ 月 _____ 日

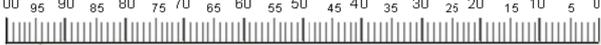
| No. | 質問 | VAS | 経験 | 支援 |
|-----|--|---|----|----|
| 1 | (ボールや選手を目で追うなどして) 視線を動かしながらスポーツを観戦しますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 2 | 音楽や人の話などを注意・集中して聞きますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 3 | 「つるつる」、「ざらざら」、「すべすべ」など、肌で触って感じていますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 4 | 甘い・苦いを味わいますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 5 | 花を見て香りを楽しもうとしますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 6 | 漢字やアルファベットを覚えるときに、お手本をまねて憶えますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 7 | 新しい作業やゲームの方法などを覚えて、スムーズに行いますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 8 | 人の話を聞いている時に、何らかの音や別の人の動作が気になって、話し手の言っていることに集中できなくなることがありますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 9 | 小説を書く、数学の定理の証明をする、物事を深く考えるなど、左記のうち1つ以上をしますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 10 | 本や新聞、インターネットの記事などを読んで知識を得ていますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p> <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |

| No. | 質問 | VAS | 経歴 | 支援 |
|-----|--|--|----|----|
| 11 | 何か問題やトラブルが起こった時に、適切な人に相談したり相手と話し合うことによって解決をしますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 12 | たくさんの選択肢の中から選択をしますか。 例えば、資格をとる、料理を作るなどといった自分の目的を達成するために数多くある書籍の中から自分に合った本を選ぶことなどです。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 13 | 単純な1つの作業を1人で最後までやり遂げますか。 単純な1つの作業とは、例えば、物を動かす、布団を敷くなどの作業です。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 14 | 3人以上で単純な1つの作業を協力して行いますか。 単純な1つの作業とは、例えば、物を動かす、布団を敷く、ベッドメイクをするなどの作業です。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 15 | 複雑な作業を1人で最後までやり遂げますか。 複雑な作業とは、例えば、料理やお菓子作りなどの作業です。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 16 | 複雑な作業を3人以上で協力して行いますか。 複雑な作業とは、例えば、お菓子作りや部品を組み立てるなどの作業です。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 17 | 毎日のスケジュールを最後までこなしますか。 毎日のスケジュールとは、例えば、風呂に入る、顔を洗う、歯を磨く、部屋の掃除をするなどのことです。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 18 | 緊張するような責任の大きな仕事を与えられたとき、最後までやり遂げますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 19 | 急に起こった危険な状況に対応できますか。 急に起こった危険な状況とは、例えば、大きな地震などです。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |
| 20 | 人の話を聞いて内容を理解しますか。 | <p>全く そのとおりである 全く そうでない</p>  <p>(%)</p> | | |

| No. | 質問 | VAS | 経験 | 支援 |
|-----|-------------------------------------|---|----|----|
| 21 | マーク、ジェスチャー、記号などをみて、何を意味しているか理解しますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 22 | 本や新聞などに書いてある内容を読んで理解しますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 23 | 自分がいいたいことを話し言葉で伝えますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 24 | 自分がいいたいことを表情やジェスチャーで伝えますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 25 | 自分の伝えたいことをメールや手紙に書いて伝えますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 26 | 他の人と話のやりとりをしますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 27 | あいさつをしたり、自己紹介をしますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 28 | 話のやりとりは続きますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 29 | 適切な時間内で自分から話を終えますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |
| 30 | 3人以上で話のやりとりは続きますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p>  <p style="text-align: right;">(%)</p> | | |

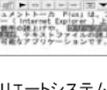
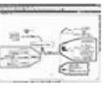
| No. | 質問 | VAS | 経験 | 支援 |
|-----|---|--|----|----|
| 31 | 会議やミーティングで自分の意見を言ったり人の意見を聞きますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 32 | 物や人にぶつからないで歩きますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 33 | 交通機関を利用して移動をしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 34 | 週に何回入浴またはシャワーをしますか。 あてはまるものに○をつけてください。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 1日に1回またはそれ以上 2. 2日に1回程度 3. 3日に1回程度 4. ①～③より少ない頻度 | | |
| 35 | 入浴、シャワーの際には、肌や顔、歯、頭皮、爪、陰部などの身体部位を洗って乾かしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 36 | 1日のうち何回歯を磨きますか。 あてはまるものに○をつけてください。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. 1日に2回またはそれ以上 2. 1日に1回程度 3. 2日に1回程度 4. ①～③より少ない頻度 | | |
| 37 | 急にトイレに行きたくなって困りますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 38 | 季節や気温に見合った服装をしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 39 | 目的に合わせた服装をしますか。 例えば、就職活動の時にスーツを着ますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 40 | 外出前には、鏡で身だしなみをチェックをしていますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |

| No. | 質問 | VAS | 経歴 | 支援 |
|-----|---|--|----|----|
| 50 | 自分で料理をしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 51 | 自分で洗濯や掃除をしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 52 | 家の手伝いをしますか。 1人暮らしの場合は、実家に帰った時に家の手伝いをしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 53 | 家族以外の人と対人関係をもっていますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 54 | 人と話していて大声を出したり、物をたたいたりしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 55 | 人の上下関係が分かりますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 56 | 道に迷った時に人に道を聞きますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 57 | 役所などで書類の申請や相談をする場合、自分でしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 58 | 友人や仲間と関わりがありますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |
| 59 | 同じ趣味の人と話をしますか。 *ここでは、対面で話をすることを指します。インターネット等を使用したチャットやメールなどは含みません。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p> | | |

| No. | 質問 | VAS | 経緯 | 支援 |
|-----|---|--|----|----|
| 60 | 家族とうまくいっていますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 61 | 恋人とうまくいっていますか。 (恋人がいない場合は、0%に印をつけてください) | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 62 | 大学、専門学校等を卒業していますか。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. はい 2. いいえ 3. 中途退学をした 4. 現在、在学中である | | |
| 63 | 自分で報酬を伴う仕事を探したり、与えられた仕事をしますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 64 | 自分の銀行口座を自分で管理し、利用していますか。 (自分の銀行口座を持っていない場合には0%に印をつけて下さい) | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 65 | 学校や職場など、定期的に通っていますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 66 | 趣味を楽しんでいますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 67 | 警察官やガードマンに声をかけて話しをすることがありますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 68 | 家族はあなたのことを手伝ってくれますか。 | <p>全く そのとおりである</p> <p>全く そうでない</p>  <p>100 95 90 85 80 75 70 65 60 55 50 45 40 35 30 25 20 15 10 5 0 (%)</p> | | |
| 69 | 連絡を取っている、または行ったことがある福祉・就労・医療機関はありますか。 | <ol style="list-style-type: none"> 1. ある 2. ない | | |

| No. | 質問 | VAS | 経験 | 支援 |
|-----|---|--|----|----|
| 70 | あるに回答された方におうかがいします。 差し支えなければ、その機関の名称を教えてください。（複数可） | 【機関名】 | | |
| 71 | 支援者はあなたのことを助けていますか。 | <p>全くそのとおりである 全くそうでない</p> | | |
| 72 | 現在、あなたは福祉や就労の制度を利用していますか。 | <p>1. 利用している</p> <p>2. 利用していない</p> | | |
| 73 | 利用していると回答された方におうかがいします。 利用している場合、その制度の名称または内容について教えてください。（複数可） | 【制度の名称、または内容など】 | | |

表1 ICF 支援ツール一覧

| ツール名 | | 参考イメージ | 説明 | 活動 参加 | | | 心身機能 | | |
|------|-----------------------|--|--|-------------------|-------------------|-----------------|--------------------------------|--|--------------------|
| 1 | 小型ひらがなキーボード |  ©テクノツール/「小型ひらがなキーボードUSB」 | 「小型ひらがなキーボード」は、「ローマ字入力が苦手な人がPCに入力を簡単にできる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「50音配列で入力できる」機能があります。これにより、「ローマ字入力をする」ことが難しい人が「入力を楽にできる」ことを支援します。 | d170 書くこと | | | b117 知的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 2 | カラーフィルター |  ©フリーソフト研究所/「如意スクリーン」 | 「カラーフィルター」は、「眩しさや視覚刺激に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「画面の照度やコントラストを調整する、カラーセロファンをかぶせる、ことで視覚刺激を軽減させる」機能があります。これにより、「(視覚刺激を多く受けてしまうため)文字やグラフを読む」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業をおこなう」ことを支援します。 | d160 注意を集中すること | d166 読むこと | | b140 注意機能 | b210 視覚機能 (b21020 光感受性) | |
| 3 | 音声認識・音声入力ソフト |  ©アイネット/「おこし名人」 | 「音声認識・音声入力ソフト」は、「音声で文章を作成すること」をねらいとしたものです。具体的には、「キーボードの代わりにパソコンに接続したマイクに向かって話すと文字を入力できる」機能があります。これにより、「キーボードで入力する」ことが難しい人が「PCの入力を行う」ことを支援します。 | d170 書くこと | d210 単一課題の遂行 | d440 細かな手の使用 | b117 知的機能 | b760 随意運動の制御機能 (b7601 複雑な随意運動の制御) | |
| 4 | ルーラー |  ©claro software/「Screen Ruler スイート」 | 「ルーラー」は、「視覚刺激を軽減させる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「読みたい場所の文章を分かりやすくする」機能があります。これにより、「多くの視覚情報を一度に読んで理解する」ことが難しい人が「分かりやすくよんだり、情報の理解を深める」ことを支援します。 | d110 注意して視ること | d160 注意を集中すること | d166 読むこと | b140 注意機能 | b156 知覚機能 | b167 言語に関する精神機能 |
| 5 | テキストリーダー |  ©クリエイトシステム/「ドキュメントカ 日本語音声合成エンジン」 | 「テキストリーダー」は、「PCで文章を音声で聞いて読みやすくすること」をねらいとしたものです。具体的には、「PC上で読みたい文章を示すと、文章を読み上げると同時に網かけがわかり、どこを読んでいるのかわかる」機能があります。これにより、「文章を読んだだけで理解することが難しい人が「文章の内容を音声で理解して内容理解を深める」ことを支援します。 | d110 注意して視ること | d166 読むこと | | b140 注意機能 | b167 言語に関する精神機能 | b156 知覚機能 |
| 6 | マインドマップ |  ©ビーイング/「Mind Manager」 | 「マインドマップ」は、「複数の情報を整理して理解したり、考えをまとめる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PC上で、マッピング(人間の脳の思考パターンをそのまま図に表した様な記述法)ソフト画面に情報を断層的に整理する」機能があります。これにより、「目や耳から多数の情報が入ったことを意味理解する」「複数の情報をもとにして考えを組み立てる」ことが難しい人が「複数の情報を整理して、視覚的に理解したり、考える」ことを支援します。 | d163 思考 | d175 問題解決 | d220 複数課題の遂行 | b160 思考 (b1603 思考の統制) | b164 高次認知機能 | |
| 7 | 手順支援ソフト |  ©明電ソフトウエア/「メモリアシスト」 | 「手順支援ソフト」は、「作業を正確な手順で、見通しを持って取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「作業の手順を文字、画像、音声で確認できる」機能があります。これにより、「マニュアルを読むこと」「作業を一度で覚える」ことが難しい人が「分かりやすく手順を確認しながら作業に取り組む」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | d210 単一課題の遂行 | d230 日課の遂行 | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | |
| 8 | 忘れ物チェックアプリ |  ©ECSコンサルティング/「毎朝チェッカー」 | 「忘れ物チェックアプリ」は、「予定していた活動を忘れずに実行したり、外出時に持ち物を忘れないようにすること」をねらいとしたものです。具体的には、「指定した時間にアラートが鳴り、画面でチェックリストを確認できるリマインダー」機能があります。これにより、「予定や持ち物を覚えておく」「予定の時間にやるべきことを思い出す」ことが難しい人が「予定した活動を行う」ことを支援します。 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | |
| 9 | スケジュール管理ボード(LEDランプつき) |  ©コムフレンド/「メモ・ディスプレイランナー」 | 「スケジュール管理ボード(LEDランプつき)」は、「予定や時間経過を把握する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「予定の内容と時間を確認できる」「次の予定までの残り時間を点灯しているランプで確認できる」機能があります。これにより、「次の活動までの残り時間を見積もる」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | |
| 10 | スケジュール管理システム | web上 | 「スケジュール管理システム(web上)」は、「パソコン上のスケジューラーを活用して1日の予定を忘れずに取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「Web上で予定を管理する」「予定の日時を携帯電話にメールで知らせることができる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | |
| | | PCソフト | 「スケジュール管理システム(PCソフト)」は、「これからの予定を忘れずに取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PCで絵や音声を使って、予定の確認ができる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | b167 言語に関する精神機能 |
| 12 | スケジューラー iPhone アプリ |  ©たすく/「たすくスケジュール」 | 「スケジューラー・iPhoneアプリ」は、「予定を把握すること」をねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneなどで、コミュニケーションカードを使って簡単にスケジュールを作成できる」機能があります。これにより、「スケジュール管理をする」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「一日の複数の予定を忘れずに取り組む」ことを支援します。 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b144 記憶機能 | b164 高次認知機能 | b167 言語に関する精神機能 |

| ツール名 | | 参考イメージ | 説明 | 活動 参加 | | | 心身機能 | | |
|------|--------------------------------|---|---|-----------------|-----------------|---------------|---------------------|-----------------------------|--------------|
| 13 | 探し物発見器 受信機複数型 |  ©クマザキエイム/「探し物探知機 どこいつ太郎 RF-315N」 | 「探し物発見器(受信機複数型)」は、「失くしたものをみつける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「親機の数字ボタンを押すと、その数字が割り当てられた子機の音が鳴ることにより、音で物の場所を伝える」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておくことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。 | d650 家庭用品の管理 | | | b140 注意機能 | b144 記憶機能 | |
| 14 | 探し物発見器 音・光案内型 |  ©サンコー/「紛失物発見器 Mini Tracker」 | 「探し物発見器(音・光案内型)」は、「失くした物を見つける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「マスター部からスレーブ部まで、光と音で対象物まで案内してくれる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておくことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。 | d650 家庭用品の管理 | | | b140 注意機能 | b144 記憶機能 | |
| 15 | 置き忘れ防止アラーム バイブレーション型 |  ©リーベックス/「離れるとアラーム3:1 WSA」 | 「探し物発見器(アラーム・バイブレーション型)」は、「物を置き忘れないようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「物から離れると、アラーム音とバイブレーションで知らせる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておくことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。 | d650 家庭用品の管理 | | | b140 注意機能 | | |
| 16 | 置き忘れ防止アラーム 警告音型 |  ©コスモテクニカ/「うっかりセンサー」 | 「探し物発見器(警告音型)」は、「物を置き忘れないようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「物から離れると、警報で忘れ物をしていることを知らせる」機能があります。これにより、「物を置いたことを覚えておくことが難しい人が「忘れ物をして物をなくさないようにする」ことを支援します。 | d650 家庭用品の管理 | | | b140 注意機能 | | |
| 17 | 施錠管理キーケース |  ©三共理研/「楽キーケース」 | 「施錠管理キーケース」は、「外出時に、鍵をかけたか否かを確認する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「施錠をした時刻を確かめられる」機能があります。これにより、「鍵をかけたか否か覚えておくことが難しい人が「不安になることを防ぐ」ことを支援します。 | d230 日課の遂行 | | | b140 注意機能 | b152 情動機能 | b160 思考機能 |
| 18 | VOCA アプリ |  ©Spectrum Visions Global/「Voice4U」 | 「VOCA(iPhone アプリ)」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現すること」をねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneで、絵や画像を使ってコミュニケーションを助ける」機能があります。これにより、「的確に言語表現することが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 19 | |  ©Droplet Project/「ドロップトーク」 | 「VOCA(iPhone アプリ)」は、「iPhoneなどで、コミュニケーションをとる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「キーボードから入力し、文章を読みあげられる」機能があります。これにより、「言葉で伝えることが難しい人が「自分の意思を伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 20 | |  ©アルカデア/「ボイスエイド」 | 「VOCA(iPhone アプリ)」は、「iPhoneなどで、コミュニケーションをとる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「キーボードから入力し、文章を読みあげられる」機能があります。これにより、「言葉で伝えることが難しい人が「自分の意思を伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b330 音声言語(発話)の流暢性とリズムの機能 | b310 音声機能 |
| 21 | 持ち運び用 |  ©こころ工房/「Gotalk ポケット」 | 「VOCA(持ち運び用)」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」「小さく持ち運びが便利である」機能があります。これにより、「的確に言語表現することが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 22 | 腕時計型 |  ©バシフィックサブライ/「トークトラック」 | 「VOCA(腕時計型)」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」「腕時計型で持ち運びが容易である」機能があります。これにより、「的確に言語表現することが難しい人が「気持ちや考えていることを伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 23 | 卓上型 |  ©バシフィックサブライ/「VOCAフレックス2」 | 「VOCA(卓上型)」は、「言語の表現が難しい人の気持ちや考えていること、行動などを的確に表現するコミュニケーションを助ける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「絵を使ってコミュニケーションを助ける」機能があります。これにより、「言葉で伝えることが難しい人が「自分の意思を伝える」ことを支援します。 | d330 話すこと | d350 会話 | | b122 一般的な心理社会的機能 | b167 言語に関する精神機能 | |
| 24 | タイムエイド 置き時計型 |  ©Timmer/「タイムタイマー(オーティブル)」 | 「タイムエイド(置き時計型)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過とともに赤い円盤が減っていく、残り時間を確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | b140 注意機能 | b164 高次認知機能(b1642時間管理) | |
| 25 | タイムエイド (60分表示) iPhoneアプリ |  ©McMor Software/「Lotus」 | 「タイムエイド(iPhoneアプリ・60分表示)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneなどで、残り時間を視覚で確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | b141 注意機能 | b164 高次認知機能(b1642時間管理) | |

| | ツール名 | 参考イメージ | 説明 | 活動 参加 | | | | 心身機能 | | | |
|----|--------------------|--------|---|-------------------|------------------|-----------------|---------------------|--------------|----------------------------|--|--|
| 26 | (10時間表示) iPhoneアプリ | | 「タイムエイド (iPhoneアプリ・10時間表示)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneなどで、残り時間を10時間まで確認できる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b142 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 27 | (ライト表示) 卓上型 | | 「タイムエイド (卓上型・ライト表示)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ライトが消えて、残り時間を示す」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b143 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 28 | (数字表示) 卓上型 | | 「タイムエイド (卓上型・数字表示)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 29 | (シンボルカード) 卓上型 | | 「タイムエイド (卓上型・シンボルカード付き)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「シンボルカードによって設定された時間までの残り時間を視覚的に知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 30 | (1日表示) 卓上型 | | 「タイムエイド (卓上型・1日表示)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 31 | (1日・カード) 卓上型 | | 「タイムエイド (卓上型・1日表示、絵カード付き)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「時間の経過が見えて、アラームで設定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 32 | パソコンソフト | | 「タイムエイド (パソコンソフト)」は、「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「PC上で、時間の経過とともに赤い円盤が減っていき、残り時間を確認できる、アラームで予定時間を知らせる」機能があります。これにより、「作業時に時間の進行や残り時間を認識する」「目標の時間までにすべき作業を終わらせる」ことが難しい人が「終わりの時間の見通しを持って作業に取り組む」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 33 | ハミガキ手洗いタイマー | | 「ハミガキ手洗いタイマー」は、「手洗いと歯磨きを習慣づける」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ボタンを押すと、ライトが点滅し始め、終了時間を知らせる」機能があります。これにより、「時間の進行や残り時間を認識する」ことが難しい人が、「終わりまで集中して取り組む」ことを支援します。 | d230 日課の遂行 | d520 身体各部の手入れ | | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 34 | 歯みがきタイマー iPhoneアプリ | | 「歯みがきタイマー・iPhoneアプリ」は、「歯みがきをきちんとすることをねらいとしたものです。具体的には、「時間の表示と共に、歯みがきの手順が表示される」機能があります。これにより、「時間の進行の認識や正確な手順で行う」ことが難しい人が、「最後まできちんと歯みがきをする」ことを支援します。 | d230 日課の遂行 | d520 身体各部の手入れ | | | b140 注意機能 | b164 高次認知機能 (b1642時間管理) | | |
| 35 | 事務用 | | 「パーテーション (事務用)」は、「周囲の環境に気をとられることなく集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「落ち着いて自分のペースで作業を行うことができる」機能があります。これにより、「(視覚情報が多いと混乱してしまったり、他人の視線が気になって)作業を行う」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業を行う」ことを支援します。 | d160 注意を集中すること | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d845 仕事の獲得・維持・終了 | b140 注意機能 | b156 知覚機能 | | |
| 36 | A4版 | | 「パーテーション (A4版)」は、「周囲の環境に気をとられることなく集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「落ち着いて自分のペースで作業を行うことができる」機能があります。これにより、「(視覚情報が多いと混乱してしまったり、他人の視線が気になって)作業を行う」ことが難しい人が「周囲の環境に気をとられることなく集中して作業を行う」ことを支援します。 | d160 注意を集中すること | d210 単一課題の遂行 | d220 複数課題の遂行 | d845 仕事の獲得・維持・終了 | b140 注意機能 | b156 知覚機能 | | |

| ツール名 | | 参考イメージ | 説明 | 活動 参加 | | | | 心身機能 | | | |
|------|--------------------|---|--|-----------------|-----------------|-----------------|-------------------|--------------------|----------------|--|--|
| 37 | 併用型 |  ©ナカバヤシ/「ムービーメモ」 | 「デジタル伝言ボード(タイムイッド併用型)」は、「伝言を理解する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「簡単に動画の録画ができる」「タイマー」機能があります。これにより、「文章で伝言を理解することが難しい人が「動画で内容理解を深める」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d230 日課の遂行 | d310 話し言葉の理解 | | b167 言語に関する精神機能 | | | |
| | 卓上型 |  ©キングジム/「卓上メモメモTM1」 | 「メモ(卓上型)」は、「メモをとる、無くさない」ことをねらいとしたものです。具体的には、「画面上に、メモをとる」「設定した日時にアラームを鳴らす」機能があります。これにより、「メモを保存しておく」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「メモを無くさない」「予定した活動を行う」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | | b144 記憶機能 | | | |
| | スケジュール型 |  ©アドプラス/「ステッキースケジュールメモウィークリー」 | 「メモ(スケジュール型)」は、「予定をすぐにメモし、失くさない」ことをねらいとしたものです。具体的には、「週間のスケジュールが書き込み、好きなど所に貼ることができる」機能があります。これにより、「メモを保存しておく」「予定を覚えておく」ことが難しい人が「メモを無くさない」「予定した活動を行う」ことを支援します。 | d210 単一課題の遂行 | d230 日課の遂行 | | | b144 記憶機能 | | | |
| | キーボード型 |  ©キングジム/「デジタルメモ帳 ポメラ」 | 「メモ(キーボード型)」は、「簡単にメモをとる」ことをねらいとしたものです。具体的には、「小型キーボード(テキスト入力)で、少しの時間でどこでもメモをとることができる」機能があります。これにより、「鉛筆でメモをとる」ことが難しい人が「テキスト入力で、素早くメモをとる」ことを支援します。 | d170 書くこと | d210 単一課題の遂行 | | | b144 記憶機能 | b760 随意運動制御 | | |
| 41 | ポケット付きカレンダー |  ©アクセスインターナショナル/「ポケットつきカレンダー」 | 「ポケット付きカレンダー」は、「その日の予定を把握する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「1日ごとに区切られたビニールシートのポケットにシンボルや写真を入れて1カ月のスケジュール表を作る」機能があります。これにより、「予定を覚えておく」ことが難しい人が「予定した活動を行う」ことを支援します。 | d230 日課の遂行 | | | | b164 高次認知機能 | | | |
| 42 | 持ち方補助具(缶・ペットボトル開け) |  ©ダイイチ/「らくらく実感オープナー」 | 「持ち方補助具」は、「手先の力の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ペットボトルや缶を容易に開けることができる」機能があります。これにより、「指先の力が弱くペットボトルや缶を開ける」ことが難しい人が「簡単に開く」ことを支援します。 | d440 細かな手の作業 | | | | b730 筋力の機能 | | | |
| 43 | ユニバーサル定規 | メモリ強調 | 「ユニバーサル定規(メモリ強調型)」は、「正確な定規の読み取りをする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「メモリに矢印が入っている、端からメモリが入っている」機能があります。これにより、「メモリを正確に読む」ことが難しい人が「容易にメモリを読む」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | | | | b140 注意機能 | b156 知覚機能 | | |
| | シリコン製 | 「ユニバーサル定規(シリコン製)」は、「手先の巧緻性に困難のある方の作図の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「ゴム製なので、固定しやすい」機能があります。これにより、「まっすぐに線を引く」ことが難しい人が「作図を容易に行う」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | d440 細かな手の作業 | | | b760 随意運動の制御機能 | | | | |
| 45 | 筆記補助具 | リング型 | 「筆記補助具」は、「手指の力の調節等がうまくできない方の筆記の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「指が適切な位置に誘導される」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚がうまくコントロールする」ことが難しい人が「鉛筆を適切な持ち方、筆圧で使用することができる」ことを支援します。 | d145 書くことの学習 | d155 技能の習得 | d170 書くこと | d440 細かな手の作業 | b760 随意運動の制御機能 | | | |
| | | グリップ型 | 「筆記補助具」は、「手指の力の調節等がうまくできない方の筆記の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「指が適切な位置に誘導される」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚がうまくコントロールする」ことが難しい人が「鉛筆を適切な持ち方、筆圧で使用することができる」ことを支援します。 | d145 書くことの学習 | d155 技能の習得 | d170 書くこと | d440 細かな手の作業 | b760 随意運動の制御機能 | | | |
| | | 三角鉛筆 | 「筆記補助具」は、「手指の力の調節等がうまくできない方の筆記の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「指が適切な位置に誘導される」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚がうまくコントロールする」ことが難しい人が「鉛筆を適切な持ち方、筆圧で使用することができる」ことを支援します。 | d145 書くことの学習 | d155 技能の習得 | d170 書くこと | d440 細かな手の作業 | b760 随意運動の制御機能 | | | |
| 48 | 柔らか消しゴム | 「柔らか消しゴム」は、「手先の力の調節がうまくできない方が容易に消しゴムを使う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「軽い消し心地でよく消える」機能があります。これにより、「指先の力のコントロールをする」ことが難しい人が「軽い力で鉛筆等を消す」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | d440 細かな手の作業 | | | b760 随意運動の制御機能 | | | | |
| 49 | シリコン製デスクシート | 「シリコン製デスクシート」は、「手先の巧緻性に困難のある方の作業時の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「紙のズレを防止し、消しゴムで消すことやコンパスの作業を容易にする」機能があります。これにより、「手指の力の調節や指先の感覚をコントロールする」ことが難しい人が「効率のよい作業をする」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | d440 細かな手の作業 | | | b760 随意運動の制御機能 | | | | |
| 50 | おもしろナイフ | 「おもしろナイフ」は、「手先の巧緻性に困難のある方が切断の補助をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「持ちやすいグリップ・刃の位置が分かりやすい」機能があります。これにより、「手先の力の調節をうまくコントロールする」ことが難しい人が「切断を容易に行う」ことを支援します。 | d155 技能の習得 | d440 細かな手の作業 | | | b760 随意運動の制御機能 | | | | |
| 51 | 小型ゴム製ボール | 「小型ゴム製ボール」は、「指先の不適切行動の軽減をする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「握ることによってリラックスできる」機能があります。これにより、「指先を動かしていないと不安」という困難のある人が「安心して作業をする」ことを支援します。 | d240 ストレスとその他心理的要求への心理的対処 | | | | b130 活動と欲動の機能 | b152 情動機能 | | | |

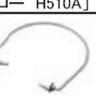
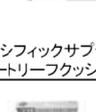
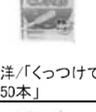
| ツール名 | | 参考イメージ | 説明 | 活動 参加 | | | 心身機能 | | | | |
|------|-----------------|--|--|---------------------------|---------------------------|------------------|------|--------------------------|--|---------------------------|--|
| 52 | ポータブルオーディオプレイヤー |  ©Sony / Walkman | 「ポータブルオーディオ プレイヤー」は、「休憩時間などの空白の時間の適切に過ごす」ことをねらいとしたものです。具体的には、「一人で静かに音楽を聴く」機能があります。これにより、「休憩時間を過ごす」ことが難しい人が「適切な余暇活動をする」ことを支援します。 | d920 レクリエーション レジャー | | | | b126 気質と 人格の 機能 | b152 情動機 能 | b156 知覚機 能 | |
| 53 | ICレコーダー |  ©Sony / 「ステレオICレコーダーICD-UX523」 | 「ICレコーダー」は、「耳からの情報の内容理解を深める」ことをねらいとしたものです。具体的には、「録音した音声をいつでも聞き直せる」機能があります。これにより、「多くの音声情報を1度に聞いて理解すること」ことが難しい人が「後から聞き返すことで、情報の理解を深める」ことを支援します。 | d115 注意して 聞くこ と | d310 話し言 葉の理 解 | | | b140 注意機 能 | b144 記憶機 能 | | |
| 54 | 電子辞書 |  ©Casio / 「Ex-word XD-D6500」 | 「電子辞書」は、「素早く語彙の理解する」ことをねらいとしたものです。具体的には、「手書き入力でも、意味を調べることができる」その意味を、音声で読み上げをしてくれる「 <u>「がさばらない」</u> 」機能があります。これにより、「辞書を引く」ことが難しい人が「短時間で視覚、聴覚から情報を得る」ことを支援します。 | d110 注意して 視るこ と | d140 読むこ との学 習 | d166 読むこ と | | b140 注意機 能 | b156 知覚機 能 | | |
| 55 | ワイヤレス補聴器 |  ©アイアシステム / 「InfraPORT Set830S」 | 「ワイヤレス補聴器」は、「他の聴覚情報に気をとられることなく目的の音声を集中して聞き取る」ことをねらいとしたものです。具体的には、「赤外線を利用して音を伝える」機能があります。これにより、「複数の人が会話している場面で、話を聞き取る」ことが難しい人が「他の人の声に気をとられることなく話を聞きとる」ことを支援します。 | d115 注意して 聞くこ と | d160 注意を 集中す ること | | | b140 注意機 能 | b156 知覚機 能 | | |
| 56 | 音量表示装置 | アプリ  ©iPad iPhoneWire / 「Noise Level」 | 「音量表示装置 (iPhone アプリ)」は、「声の大きさのコントロールをできるようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「iPhoneで、音量をグラフで知らせる」機能があります。これにより、「自分の声の音量のコントロールする」ことが難しい人が「適切な声の大きさを会話をする」ことを支援します。 | d330 話すこ と | d350 会話 | | | b330 音声機 能 | | | |
| 57 | | 持ち運び用  ©コムフレンド / 「光る声のものさし「Voice Ruler」(ボイスルーラー)」 | 「音量表示装置 (持ち運び用)」は、「声の大きさのコントロールをできるようにする」ことをねらいとしたものです。具体的には、「自分の声の音量をライトで知らせる」機能があります。これにより、「自分の声のコントロールをする」ことが難しい人が「適切な声の大きさを会話をする」ことを支援します。 | d330 話すこ と | d350 会話 | | | b330 音声機 能 | | | |
| 58 | ノイズキャンセリングツール | ヘッドホン型  ©PELTOR / 「イヤーマフ イエロー H510A」 | 「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。 | d160 注意を 集中す ること | | | | b156 知覚機 能 | b140 注意機 能 | | |
| 59 | | 軽量型  ©EAR / 「イヤーフレックス」 | 「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」 <u>「軽量で頭に違和感がない」</u> 機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。 | d161 注意を 集中す ること | | | | b140 注意機 能 | b156 知覚機 能 | b265 触覚 | b270 温度や その他の 刺激に 関連し た感覚 機能 |
| 60 | | イヤホン型  ©EAR / 「エクスプレス (コード付き耳栓)」 | 「ノイズキャンセリングツール」は、「周囲の音に気をとられることなく集中して作業に取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「装着することによって音を遮断する」 <u>「イヤホン型で締め付け感がない」</u> 機能があります。これにより、「音に過敏に反応しやすい」という困難がある人が「集中して作業を行う」ことを支援します。 | d162 注意を 集中す ること | | | | b140 注意機 能 | b156 知覚機 能 | b265 触覚 | b270 温度や その他の 刺激に 関連し た感覚 機能 |
| 61 | 座位補助クッション |  ©Passifickサブライ / 「ハートリーフクッション」 | 「座位補助クッション」は、「椅子に座った状態での作業を集中して取り組む」ことをねらいとしたものです。具体的には、「骨盤を固定し、左右のバランスがとれるように調整する」機能があります。これにより、「長時間座っている」 <u>「姿勢が正しくする」</u> ことが難しい人が「周囲から注意されることなく、姿勢を保持して、集中して作業を行う」ことを支援します。 | d415 姿勢の 維持 | | | | b730 筋力の 機能 | b740 筋の持 久性機 能 | | |
| 62 | 粘着タイプの耳かき |  ©山洋 / 「くっつけて取る綿棒50本」 | 「粘着タイプの耳かき」は、「不快感なく、耳の手入れを行う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「粘着剤付きで耳垢をくっつけて取る」機能があります。これにより、「耳かきをする」ことが難しい人が「不快感を軽減して耳の手入れを行う」ことを支援します。 | d440 細かな 手の使 用 | d520 身体各 部の手 入れ | | | b265 触覚 | b270 温度や その他の 刺激に 関連し た感覚 機能 | b760 随意運 動の制 御機能 | |
| 63 | 電動歯ブラシ |  ©Panasonic / 「音波振動ハブラシドルツィオン EW-D41」 | 「電動歯ブラシ」は、「歯の手入れを十分に行う」ことをねらいとしたものです。具体的には、「歯茎にやさしく、しっかりと歯磨きができる」機能があります。これにより、「きれいに歯磨きをする」ことが難しい人が「不快感を軽減して歯の手入れを行う」ことを支援します。 | d440 細かな 手の使 用 | d520 身体各 部の手 入れ | | | b265 触覚 | b270 温度や その他の 刺激に 関連し た感覚 機能 | b760 随意運 動の制 御機能 | |
| 64 | 電気ポット |  ©タイガー / 「電気ケトル PFY-A080」 | 「電気ポット」は、「安全にお湯を沸かす」ことをねらいとしたものです。具体的には、「沸騰すると自動的に電源が切れる」 <u>「倒れてもお湯漏れを抑える」</u> 機能があります。これにより、「スイッチを確実に切る」ことが難しい人が「安全にお湯を沸かす」ことを支援します。 | d630 調理 | | | | b140 注意機 能 | | | |

図 1 ICF に基づく支援ツールマップ

()内数字は 表1 ICF支援ツール一覧参照

| 活動・参加 心身機能 | | 第1レベル | 第2レベル | | | | | | | |
|---------------|-----------------|-------------------------|------------------------------------|-----------------------------|-------------|------|--------------|--|--------------|------|
| | | 第1レベル | 第2レベル | 目的をもった感覚的経験 | | | 基礎的学習 | | | |
| | | | | d110 | d115 | d120 | d130 | d140 | d145 | d155 |
| | | | 注意して視ること | 注意して聴くこと | その他の目的のある感覚 | 模倣 | 読むことの学習 | 書くことの学習 | 技能の習得 | |
| 1 | 精神機能 | 全般的な精神機能 | b110 意識機能 | | | | | | | |
| | | | b117 知的機能 | | | | | | | |
| | | | b122 全般的な心理社会的機能 | | | | | | | |
| | | | b126 気質と人格の機能 | | | | | | | |
| | | | b130 活力と欲動の機能 | | | | | | | |
| | 個別的精神機能 | b140 注意機能 | ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54) | ICレコーダー(53) ワイヤレス補聴器(55) | | | 電子辞書(54) | | ユニバーサル定規(43) | |
| | | b144 記憶機能 | | ICレコーダー(53) | | | | | 手順支援ソフト(7) | |
| | | b152 情動機能 | | | | | | | | |
| | | b156 知覚機能 | ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54) | ワイヤレス補聴器(55) | | | 電子辞書(54) | | ユニバーサル定規(43) | |
| | | b160 思考機能 | | | | | | | | |
| 2 | 感覚機能と痛み | b164 高次認知機能 | | | | | | | | |
| | | b167 言語に関する精神機能 | ルーラー(4) テキストリーダー(5) | | | | | | 手順支援ソフト(7) | |
| | | b210 視覚機能 | | | | | | | | |
| 3 | 音声と発話の機能 | b265 触覚 | | | | | | | | |
| | | b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能 | | | | | | | | |
| | | b310 音声の機能 | | | | | | | | |
| 7 | 神経筋骨格と運動に関連する機能 | b320 構音機能 | | | | | | | | |
| | | b330 音声機能 | | | | | | | | |
| | | b730 筋力の機能 | | | | | | | | |
| | | b740 筋の持久性機能 | | | | | | | | |
| | | b760 随意運動制御 | | | | | 筆記補助具(45~47) | ユニバーサル定規(44) 筆記補助具(45~47) 柔らかか消しゴム(48) シリコン製デスクシート(49) おもしろナイフ(50) | | |

| 1 | | | | | |
|--|------------|---|---|------------|------|
| 学習と知識の応用 | | | | | |
| 知識の応用 | | | | | |
| d160 | d163 | d166 | d170 | d175 | d177 |
| 注意を集中すること | 思考 | 読むこと | 書くこと | 問題解決 | 意思決定 |
| | | | 小型ひらがなキーボード(1) 音声認識・音声入力ソフト(3) | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| ルーラー(4) カラーフィルター(2) パーテーション(35~36) ワイヤレス補聴器(55) ノイズキャンセリングツール(58~60) | | カラーフィルター(2) ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54) | | | |
| | | | メモ(40) | | |
| | | | | | |
| ルーラー(4) パーテーション(35~36) ワイヤレス補聴器(55) ノイズキャンセリングツール(58~60) | | ルーラー(4) テキストリーダー(5) 電子辞書(54) | | | |
| | マインドマップ(6) | | | マインドマップ(6) | |
| | マインドマップ(6) | | | マインドマップ(6) | |
| ルーラー(4) | | ルーラー(4) テキストリーダー(5) | 小型ひらがなキーボード(1) | | |
| カラーフィルター(2) | | カラーフィルター(2) | | | |
| ノイズキャンセリングツール(59~60) | | | | | |
| ノイズキャンセリングツール(59~60) | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | | | |
| | | | 音声認識・音声入力ソフト(3) ユニバーサル定規(44) 筆記補助具(45~47) メモ(40) | | |

| 活動・参加 | | 2 | | | | |
|-------|-----------------|-----------------------------|--|--|--|--------------|
| | | 一般的な課題と要求 | | | | |
| 心身機能 | | 第1レベル | | 第2レベル | | |
| | | d210 | d220 | d230 | d240 | |
| | | 単一課題の遂行 | 複数課題の遂行 | 日課の遂行 | ストレスとその他の心理学的要求への対処 | |
| 第1レベル | 第2レベル | | | | | |
| 1 | 精神機能 | 全般的な精神機能 | b110 意識機能 | | | |
| | | | b117 知的機能 | 音声認識・音声入力ソフト(3) | | |
| | | | b122 全般的な心理社会的機能 | | | |
| | | | b126 気質と人格の機能 | | | |
| | | | b130 活力と欲動の機能 | | | 小型ゴム製ボール(51) |
| | 個別的精神機能 | b140 注意機能 | タイムエイド(24~32) パーテーション(35~36) | タイムエイド(24~32) パーテーション(35~36) | 施錠管理キーケース(17) タイムエイド(24~32) ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34) | |
| | | b144 記憶機能 | 手順支援ソフト(7) メモ(38~40) | 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10~11) スケジューラーiPhone アプリ(12) | 手順支援ソフト(7) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10~11) スケジューラーiPhone アプリ(12) メモ(38~39) | |
| | | b152 情動機能 | | | 施錠管理キーケース(17) | 小型ゴム製ボール(51) |
| | | b156 知覚機能 | パーテーション(35~36) | パーテーション(35~36) | | |
| | | b160 思考機能 | | マインドマップ(6) | 施錠管理キーケース(17) | |
| | b164 高次認知機能 | 手順支援ソフト(7) タイムエイド(24~32) | マインドマップ(6) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10~11) スケジューラーiPhone アプリ(12) タイムエイド(24~32) | 手順支援ソフト(7) 忘れ物チェックアプリ(8) スケジュール管理ボード(9) スケジュール管理システム(10~11) スケジューラーiPhone アプリ(12) タイムエイド(24~32) ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhone アプリ(34) ポケット付きカレンダー(41) | | |
| | b167 言語に関する精神機能 | メモ(37) | スケジュール管理システム(11) スケジューラーiPhone アプリ(12) | スケジュール管理システム(11) スケジューラーiPhone アプリ(12) メモ(37) | | |
| 2 | 感覚機能と痛み | b210 視覚機能 | | | | |
| | | b265 触覚 | | | | |
| | | b270 温度やその他の刺激に関連した感覚機能 | | | | |
| 3 | 音声と発話の機能 | b310 音声の機能 | | | | |
| | | b320 構音機能 | | | | |
| | | b330 音声機能 | | | | |
| 7 | 神経筋骨格と運動に関連する機能 | b730 筋力の機能 | | | | |
| | | b740 筋の持久性機能 | | | | |
| | | b760 随意運動制御 | 音声認識・音声入力ソフト(3) メモ(40) | | | |

| 3 コミュニケーション | | | | | | | 4 運動・移動 | | | | |
|----------------|--------------|-----------------|--------------|--------------|-----------------|-------------------------|------------|------------|---------|-----------------|------------|
| コミュニケーションの理解 | | | コミュニケーションの表出 | | | 電話並のコミュニケーション用具および技法の利用 | 姿勢の変換と保持 | 物の運搬・移動・操作 | 歩行と移動 | 交通機関や手回し利用しての移動 | |
| d310 | d315 | d325 | d330 | d335 | d345 | d350 | d355 | d415 | d440 | d450 | d470 |
| 話し言葉の理解 | 非言語的メッセージの理解 | 書き言葉によるメッセージの理解 | 話すこと | 非言語的メッセージの表出 | 書き言葉によるメッセージの表出 | 会話 | ディスカッション | 姿勢の保持 | 細かな手の使用 | 歩行 | 交通機関や手段の利用 |

| | | | | | | | | | | | |
|-------------|--|--|-------------------------------|--|--------------------|-------------------------------|--|---------------|---|--|--|
| | | | | | | | | | 音声認識・音声入力ソフト(3) | | |
| | | | VOCA(18~23) | | VOCA(18~23) | VOCA(18~23) | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| ICレコーダー(53) | | | | | | | | | | | |
| ICレコーダー(53) | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| メモ(37) | | | VOCA(18~19, 1~23) | | VOCA(18~19, 21~23) | VOCA(18~19, 21~23) | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | |
| | | | | | | | | | 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | |
| | | | VOCA(20) | | VOCA(20) | VOCA(20) | | | | | |
| | | | VOCA(20) | | VOCA(20) | VOCA(20) | | | | | |
| | | | VOCA(20) 音量表示装置 (56~57) | | VOCA(20) | VOCA(20) 音量表示装置 (56~57) | | | | | |
| | | | | | | | | 座位補助クッション(61) | 持ち方補助具(缶・ペットボトル開け)(42) | | |
| | | | | | | | | 座位補助クッション(61) | | | |
| | | | | | | | | | 音声認識・音声入力ソフト(3) ユニバーサル定規(43) 筆記補助具(45~47) 柔らか消しゴム(48) シリコン製デスクシート(49) おもしろタイプ(50) 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | |

| 活動・参加 心身機能 | | 5 セルフケア | | | | | 6 家庭生活 | | | | | | |
|----------------------|-------------|------------|--------------------|--|-------|-----------|-----------|------------|------|-----------|------------------|------------------------------------|--|
| | | 第1レベル | | | | | 必需品の入手 | | 家事 | | 家庭用品の管理および他者への援助 | | |
| | | d520 | d530 | d540 | d550 | d570 | d610 | d620 | d630 | d640 | d650 | d660 | |
| | | 身体各部の手入れ | 排泄 | 更衣 | 食へること | 健康に注意すること | 住居の入手 | 物品とサービスの入手 | 調理 | 調理以外の家事 | 家庭用品の管理 | 他者への援助 | |
| 1 精神機能 | 全般的 精神機能 | b110 | 意識機能 | | | | | | | | | | |
| | | b117 | 知的機能 | | | | | | | | | | |
| | | b122 | 全般的な心理社会的機能 | | | | | | | | | | |
| | | b126 | 気質と人格の機能 | | | | | | | | | | |
| | | b130 | 活力と欲動の機能 | | | | | | | | | | |
| | 個別的 精神機能 | b140 | 注意機能 | ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhoneアプリ(34) | | | | | | 電気ポット(64) | | 探し物発見器(13~14) 置き忘れ防止アラーム(15~16) | |
| | | b144 | 記憶機能 | | | | | | | | | 探し物発見器(13~14) | |
| | | b152 | 情動機能 | | | | | | | | | | |
| | | b156 | 知覚機能 | | | | | | | | | | |
| | | b160 | 思考機能 | | | | | | | | | | |
| 2 感覚機能と 痛み | 個別 感覚機能 | b164 | 高次認知機能 | ハミガキ手洗いタイマー(33) 歯みがきタイマーiPhoneアプリ(34) | | | | | | | | | |
| | | b167 | 言語に関する精神機能 | | | | | | | | | | |
| | | b210 | 視覚機能 | | | | | | | | | | |
| 3 音声と発話の 機能 | 個別 感覚機能 | b265 | 触覚 | 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | | | | | | | | |
| | | b270 | 温度やその他の刺激に関連した感覚機能 | 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | | | | | | | | |
| | | b310 | 音声の機能 | | | | | | | | | | |
| 7 神経筋骨格と運動に関連する機能 | 個別 感覚機能 | b320 | 構音機能 | | | | | | | | | | |
| | | b330 | 音声機能 | | | | | | | | | | |
| | | b730 | 筋力の機能 | | | | | | | | | | |
| | 個別 感覚機能 | b740 | 筋の持久性機能 | | | | | | | | | | |
| | | b760 | 随意運動制御 | 粘着タイプの耳かき(62) 電動歯ブラシ(63) | | | | | | | | | |

ったり、余暇活動のための動機になります。

5. 後見人制度と財産管理

障害の程度により、障害者年金を受け取ることができません。障害があっても働けなくても無収入とは限りません。年金を管理したり、サービス費用を支払ったり、生活に必要な出納管理を障害のある人に代わって行う役割を「後見」といい、家族以外の人に依頼することもできます[2]。高齢者の後見人は他人に依頼する場合は4割を超えていません。障害は「他人には分かり難い」と考えがちですが、後見をするチームの一員として、きょうだいは精神的な配慮を分担する方法が勧められています。



6. 友人・パートナー

友人や配偶者に、自分の家族のことを分かっもらうのは、一般にも難しいものです。家族に障害があるとなおさらです。いつ、どんな風に説明をしたらいいのか、相手はどんな風に受け止めるのかで迷うことや嫌な経験をすることもありますが、思ったよりもあんなにできなかったという場合もあります。

2. 住居の選択

一般的には、障害のある人の生活を「施設から地域へ」移すことが勧められています。施設では運営上の制約が多く、食事、入浴、活動の時間や方法が決められていて不自由だという不満があるからです。一方で、地域で生活をするためのサービスが整備されていないために、家族に負担がかかりすぎる場合もあります。

住居の選択肢には、障害者施設、中間的ケア施設、グループホーム、半独立の生活、家族との同居、独立した生活があります。グループホームは、地域で数人の障害のある人が支援スタッフと一緒に住む形式です。他にも色々な形式が提案されています。費用、職員、待機リスト、食事、衣服、性、習慣など個人的な問題も、住居の選択には関係します。

3. 家族内のコミュニケーション

障害のこと・障害により心配されること・家族間の関係に関して、家族の中で話し合うのは難しいことが知られています。きょうだい、障害のある人、父親、母親、重要な支援者の間で、問題となる課題を話し合うことは重要です。家族の問題には、色々な要素があるので、家族外の専門家や同じ立場のきょうだいから経験を聞くのも役に立ちます。

4. 仕事と活動・余暇

障害のある人の能力を生かすための地域での活動や就労の機会は大事です。福祉作業所、援助つき雇用、一般就労などがあります。収入は少なくとも、仕事や活動は、生きがいや交流の機会とな



1. 障害のある人のための施策の変化

障害のある人のための国、都道府県、市町村によるサービスは時代と共に変化しています。今は、家族がするしかないことも、制度が変わってサービスを利用できるようになる場合もあります。第二次大戦までは、障害のある人への公的サービスは、ほとんどありませんでした。逆に、義務教育を受けなくてもよいという制度（就学猶予）がありました。障害があっても、特殊学校で義務教育を受けることが保障されたのは1979年からです。2006年に、国連では障害者権利条約が採択され、日本でも、この条約の批准のために、法律の改正が検討されています。これらの変革では、障害のある人、家族、支援者の意見も取り入れられています。

自閉症と発達障害に関する情報提供機関としては国に発達障害情報・支援センターが、相談・支援機関としては都道府県に発達障害者支援センターがあります[1]。

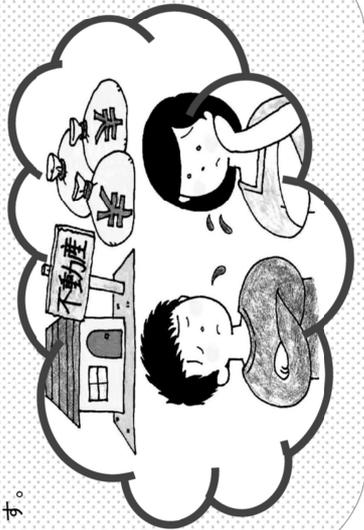
7. 遺伝相談

遺伝に関する疑問をもち悩んでいるきょうだいは多くいます。「自分の子どもが同じような障害をもつ可能性は普通より高いのか?」「私にも何か異常があるのではないか?」という疑問です。

主治医の多くは、きょうだいに障害について説明をすることは好意的です。しかし、診療科目として「きょうだいのための相談」はありませんので、親御さんに相談していただくのが一般的な入り口です。しかし、「心配していることで、さらに親を心配させるのではないか」と考えるきょうだいが多く、専門機関から説明を受けにくくなっています。また、医学的な説明を聞くのではなく、心理的な相談がしたい場合もあります。遺伝相談(遺伝カウンセリング)は疾患別の場合が多いですが、インターネットで検索することができます[3]。

8. 遺産相続

日本に特有の課題として、親の介護負担が、きょうだいだけにかかることがあります。また、親の遺産の遺し方や使い方が偏ることで葛藤が残ることがあります。



9. 健康管理と保険

障害がある人は、健康保持に知識を得にくかったり、症状を説明し難いことから、病気の発見が遅れるのではないかと心配されることがあります。また、保険に入れないこともありえます。これらに対応して、日本自閉症協会は互助会を作り、「知的障がい・発達障がいのある人のための総合保険」も作られています[4]。

10. 生涯発達

人間は、一生、発達し続けます。障害のある人は、ゆっくりと発達する場合がありますが、成人してからも少しずつ変化します。進学、就職、結婚、子育てといった新しいライフイベントを経験する機会が少ないので、同世代の人との差は、年齢があがるにつれて開いて見えていきませんが、変化をしないわけではありません。

【参考資料】

1. 発達障害者情報・支援センター
<http://www.rehab.go.jp/ddis/>
2. 成年後見制度について(埼玉県)
<http://www.pref.saitama.lg.jp/site/3-seinen-kouken/>
3. 信州大学遺伝ネットワーク
<http://www.shinshu-u.ac.jp/hp/bumon/gene/genetopia/index.htm>
4. 知的障がい・発達障がいのある人のための総合保険
<http://www.z-kyosai.com/>

【連絡先】

国立障害者リハビリテーションセンター研究所
障害福祉研究部 北村弥生

障害のある人の将来



このパンフレットには、多くの家族が心配している「障害のある人の将来」に関する話題を紹介しています。これらの話題は話す機会が少ないので、ここに明確にすることで、家族、支援者、友人、同じきょうだいの立場の人と話すきっかけにしていきたいと思えます。アメリカでは、成人したきょうだいで、これらの課題を、ひとつずつ話し合うプログラムが開発されています。同じ立場のきょうだいで話す機会はないので、連絡先にお問い合わせをさせていただきます。日本版のプログラム開発をさせていただきますと考えています。

入所知的障害者のきょうだいの課題と対処方法

○北村弥生（国立障害者リハビリテーションセンター研究所）

上田礼子（沖縄県立看護大学、保健看護学研究科）

キーワード：情報提供、成年後見、自己概念

目 的

障害児（者）・慢性疾患患児（者）のきょうだいには多様な課題があることが知られている。きょうだいの多様な課題とは、親の関心が障害児に集中するための寂しさ、障害に関する情報不足による必要以上の不安、学校や地域で出会う偏見、親亡き後の障害者の後見の負担などである。しかし、きょうだい研究の発端が脱施設化のために障害児が家庭で養育されることによるきょうだいへの影響であったことから、入所者ときょうだいの関係については知見が見当たらない。目下、施設入所から地域移行が推進されるが、施設入所が必要な子どもはいる。本研究は、入所者ときょうだいの関係及び入所者のきょうだいの課題の実態を明らかにし、良好な家族関係を築くための支援に資することを目的とする。

方 法

重度知的障害の入所者 48 名の保護者に対し、調査の打診を行い、調査協力が承諾が得られなかった 5 名（うち 2 名は、ひとりっ子であることが理由と回答された）と宛先不明で打診書が返却された 2 名を除いた 41 名の保護者宛に、保護者ときょうだい用の質問紙と返信用封筒を送付し、記入して返信することを依頼した。

結 果

1. **対象者の属性**：調査用紙は、保護者 13 名 31.7%（父親 5 名、母親 7 名、不明 1 名）、きょうだい 15 名 34.1%から返信された。保護者からの回答によると、父親は平均 60.1 歳（幅：46～73 歳）、母親は平均 63.5 歳（幅：46～73 歳）、きょうだいは平均 30.8 歳（5～46 歳）、入所者は平均 33.9 歳（幅：11～47 歳）であった。きょうだい総数は 17 名、同居者 12 名（未成年 4 名）であった。入所者のうち成人は 9 名（69.2%）であった。父親不在の 4 家族中 3 家族で母親は 70 歳以上であり、母親不在は 1 家族であった。入所年数は平均 19.6 年（4～39 年）、年間帰省日数は平均 52.5 日（0～130 日）であった。

2. **きょうだいに関する心配**：保護者 13 名のうち 8 名は「きょうだいに関する心配がある／あった」と回答し、内容は、「きょうだいの結婚」、「きょうだいの学校での生活」、「親亡き後のきょうだいの役割」、「きょうだい障害児の世話にかかりきりになる」であった。しかし、対処方法を記載したのは 2 名のみで「医療・福祉・家庭の協力」「親が障害児に夢中になりすぎずに、きょうだいにはきょうだい自分中心に歩ませることを勧める」と回答した。一方、回答したきょうだい 15 名中 9 名が、「入所者について困ったことがあった」と記入し、その内容は、「家庭での行動」6 名、「親亡き後の後見」2 名、「機能低下」1 名、「外出中にジロジロ見られたこと」1 名、「入所者の世話を親から求められたこと」1 名であった。「親亡き後の後見」は中学生 2 名から「まったく情報

ない不安」が記載された。対処は 5 名から挙げられ、「親の対処方法をまねる」3 名、「怒る」2 名であった。親子の間で、入所者に関する心配事が一致したものはなかった。

3. **きょうだいの経験**：障害児のきょうだいがよく経験する事象について、4 点法で 19 項目について頻度を求めた結果、平均値が 2.5 以上であったのは 9 項目あった。大きい順に、「入所者の将来を心配する」3.77、「親は入所者の世が大変で辛そうな時がある*」3.46、「自分のことで親に心配をかけたくない」3.31、「入所者の障害のことを同級生には話していない*」2.93、「入所者から嫌なこと、困ったことをされたことがある」2.93、「親は入所者を、将来、自分に見てほしいと思っている*」2.73、「入所者のために、家族の計画が予定通りにいかないことがある*」「私はきょうだいと一緒にいるのが好きだ」2.67、「親は入所者の障害を親のせいだと思っている」2.55 であった。この 9 項目中 4 項目は地域で生活する障害者のきょうだいでの平均点は低かった（低い項目に*）。

一方、平均値が 2 点未満だったのは 6 項目で、得点が小さい順に、「進路決定に入所者の障害は影響した」1.42、「きょうだいについての情報収集をしている」1.45、「恋愛や結婚に入所者の障害は影響した」1.46、「きょうだいという意識はあまりない」1.86、「入所者の障害について友人にうまく説明できない」1.92、「秩父学園にきょうだい会があれば参加したい」2.00 であった。

4. **自己概念**：対照群に比べて、自己概念得点は母親群で有意に低く、きょうだい群と父親群では有意差はなかった。

5. **入所者の後見人**：すでに後見人手続きをとっていたのは 4 名（きょうだい 3 名、弁護士 1 名）で、父親の平均年齢は 68.5 歳であった。ほかに 4 名は「きょうだいを後見人にする予定」と回答し、うち 2 名のきょうだいは未成年であった。残りの 5 名は、「後見人の予定」に無回答であった。

6. **家族に対する支援のニーズ**：14 項目に対する保護者 14 名の記入数は 62 あったのに比べて、15 歳以上のきょうだい 13 名の記入数は 33 で有意に少なかった。

考 察

本調査の回収率は 3 割程度であり入所者の家族の状況を代表するとは言い難いが、困難度得点の高いきょうだいの意識は、入所者のきょうだいと地域で生活する障害者のきょうだいの間で差異が認められた。また、未成年のきょうだいも保護者から「後見人」と考えられており、きょうだい自身からの「親亡き後の心配」「障害についての情報不足」の回答は、入所者の将来を見据えた情報提供を未成年のきょうだいにも行う必要があることを示唆する。さらに、成人期から老年期の母親の自己概念が対照群よりも有意に低いことは、母親に対する支援の必要性を強く示唆する。

(KITAMURA Yayoi, UEDA Reiko)